



末日聖徒イエス・キリスト教会

**聖徒の道**

1986

**4**

# 聖徒の道

## 1986年4月号

本書は「エンサイン」「ニューエラ」「フレンド」の記事を抜粋した、末日聖徒イエス・キリスト教会の公式刊行物です。

大管長会：エズラ・タフト・ベンソン、ゴードン・B・ヒンクレー、トーマス・S・モンソン

十二使徒定員会：マリオン・G・ロムニー、ハワード・W・ハンター、ボイド・K・パッカー、マービン・J・アシュトン、L・トム・ベリー、デビッド・B・ヘイト、ジェームズ・E・ファウスト、ニール・A・マックスウェル、ラッセル・M・ネルソン、ダリン・H・オークス、M・ラッセル・バラード

顧問：カーロス・E・エイシー、レックス・D・ピネガー、ジョージ・P・リー、ジェームズ・M・パラモア

編集長：カーロス・E・エイシー

教会機関誌ディレクター：ウェイン・B・リン

編集主幹：ラリー・A・ヒラー

編集副主幹：デビッド・ミッチェル

子供の頁編集：ロイス・リチャードソン

レイアウト/デザイン：メアリー・A・ホドソン、C・キンボール・ボット



聖徒の道 1986年4月号第30巻第4号

発行所 末日聖徒イエス・キリスト教会

〒106東京都港区南麻布5-10-30

電話 03-440-2351

印刷所 株式会社 精興社

定価 年間予約/海外子約2,200円(送料共)

半年子約1,100円(送料共)

普通号150円、大会号(1,7月号)350円

International Magazines PBMA0449JA

Printed in Tokyo, Japan.

Copyright ©1986 by the Corporation of the President of the Church of Jesus Christ of Latter-day Saints. All rights reserved.

●定期購読は、「聖徒の道予約申し込み用紙」でお申し込みになるか、または現金書留か振替(口座名/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター 振替口座番号/東京0-41512)にてご送金いただければ、直接郵送致します。●「聖徒の道」のお申し込み先……〒150東京都渋谷区桜丘町28-8/末日聖徒イエス・キリスト教会 渋谷ブックセンター/☎03-464-1617●「聖徒の道」についての配送のお問い合わせ……〒194東京都町田市小川11704-1/末日聖徒イエス・キリスト教会 資材管理部配送センター/☎0427-96-2820

### ●—もくじ

表紙●大管長会(エルドン・K・リンショテン撮影)

神殿について子供たちに教える	エズラ・タフト・ベンソン	1
質疑応答(動物は死後どうなるか)	ラマー・ファーンズワース	7
個人の自由について思うこと	ロバート・M・ウィルクス	8
福音を分かち合う祝福	カーロス・E・エイシー	12
主が私を遣わしてくださったのです	パティー・ラーラ	19
「モルモン経は神様のみ言葉です」	ジェラルディン・ピゴット・ゴールドディング	22
進め信仰もて(讚美歌)		表3
各地のたより		
子供のページ(別冊付録)		
みんなであそぼう	スザンヌ・S・ディーン	1
バプテスマのヨハネ	ジュディー・スティーブン・スミス	2
おなじものをさがしてみよう	コリーン・フェイ	5
イースターのおはなし		6

## 大管長会メッセージ

# 神殿について 子供たちに教える

エズラ・タフト・ベンソン大管長



スイス神殿

**私**がヒーバー・J・グラント大管長に最後にお会いしたのは、大管長がかなり高齢になられていたときのこと、場所は教会本部でした。グラント大管長を乗せた車が本部の建物に着くと、運転手は大管長の体を支えて執務室へ連れて行くのを手伝ってもらうために、ひとりの兄弟を呼びました。

グラント大管長が玄関に向かっておられたとき、私もちょうど本部の中へ入るところでした。大管長は介添えのふたり

の兄弟に、「向こうから来られるのはベンソン兄弟ですか」と聞かれました。

ふたりが「そうです」と答えると、大管長は、「ベンソン兄弟、こちらですよ。いらっしゃい」と声をかけてくださいました。

大管長は私が近づくとこう言われました。「プリガム・ヤングがあなたのひいおじいさんに仕組んだ『陰謀』のことを前にお話したことがありましたかね。」

私は、「いいえ、プリガム・ヤングがだ

れかに対して陰謀を仕組んだなどという話は、ついぞ聞いたことがありませんが」と答えました。

すると大管長は、「ところが、あるのですよ。それを聞かせてあげましょう」と言われました。

しかし、私は、ふたりの兄弟が大管長のほとんど全体重を支えて大変な思いをしているのがわかっていましたので、「また別のときにお伺いいたします。そのときにぜひお聞かせください」と言いまし

問題や困難の重さにつぶれてしまいそうになったとき、私は心にその答えを祈り求めながら、主の宮居へ行きました。



ヌクアロハ(トンガ)神殿



パペーテ(タヒチ)神殿

た。

ところが大管長は「いや、今お話ししますよ。この兄弟たちが私を支えてくださるから大丈夫です」と言われるのです。

「シオン銀行がどこにあるかご存じですね。メインストリートとサウステンプルストリートの角です。」

「はい」とお返事しました。

「あなたのひいおじいさんは、あの角地に、ブリガム・ヤングの家（現在もライオンハウスとしてその姿を残している）を別にすれば、ソルトレーク・シティで一番美しい家を建てられた。最後の仕上げも終わって、とてもきれいな家でしたよ。二階建ての家の表と裏には、1階と2階にそれぞれベランダが付いていて、家の周りに白塗りの柵がめぐらされていました。果樹や美しい木が植えられ、庭にはせせらぎが音をたてていました。ところが、それまで住んでいた丸太小屋から家族が引っ越すばかりになったある日、ヤング大管長の事務所に呼ばれて、こう言われたのです。『ベンソン兄弟、ユタ北部のキャッシュ盆地へ行行って開拓を行ない、聖徒たちを管理していただきたいのです。家はダニエル・H・ウエルズ兄弟にお売りになってはいかがでしょうか。』

ところが、考えてみるとダニエル・H・ウエルズはブリガム・ヤングの副管長

だったのですよ。これはどう考えても『陰謀』でしょうな。さて兄弟たち行きましょうか。」

私はそれまで、毎年ベンソン家の親族の集まりに顔を出していましたが、そんな話は聞いたこともありませんでした。それで教会歴史部に問い合わせしてみると、グラント大管長の言われたとおりでであることがわかりました。その古い家の写真もあるということでした。

それ以来私は、ヤング大管長のいわゆる「陰謀」をありがたく思っています。それがなければ、ベンソン家とキャッシュ盆地の結び付きはなかったはずだからです。

私はキャッシュ盆地が大好きです。土地の聖徒たちを愛しています。とりわけローガンの美しい神殿を感謝しています。この神殿はまさしく、キャッシュ盆地を照らす灯台の光でした。私たちが子や孫たちによく教えるならば、この聖なる建物はいつまでも重要な意味を持つ象徴として立ち続けることでしょう。

神殿は、家族を永遠のものにしたいという主のみこころをいつも思い起こさせてくれます。父親や母親が神殿を指して、子供たちに「お父さんとお母さんはあそこで永遠の結婚をしたのだよ」と話して聞かせるのは、とても素晴らしいことです。それによって、幼い内から子供たち

の心の中に、神殿結婚が永遠の理想として植え付けられていきます。

私は神殿に対する記憶を少年時代の昔までたどることができるのを、主に感謝しています。私の家は農家でしたが、アイダホ州のホイットニーにいた子供の頃、外から帰って来て家に近づくと、『今日われ善きことせしか』（『讃美歌』92番）と母の歌声が聞こえてきました。

あのとこのことは、まぶたの裏にはつきりと焼き付いています。母は額に玉の汗を浮かべながら、床にきれいな紙を敷き、その上から、アイロン台にかがみこむようにして細長い白布にアイロンを当てていました。何をしているのか聞くと、「ああ、坊や、これは神殿衣よ。父さんと母さんはローガンの神殿に行くのよ」と言いました。

母はそれから旧式のアイロンをストーブの上に置くと、私のそばに自分のいすを近づけて、神殿のことを話し、神殿に入る資格を得、そこで行なわれる神聖な儀式にあずかることがどれほど大切かを教えてくれました。そして、母はいつか自分の孫、ひ孫たちがこのすばらしい祝福にあずかれるよう心から願っていることも話してくれました。

神殿活動にまつわるこれらの懐かしい思い出は我が家にとっても、また会員数300ほどの小さななかのワード部や当時の



東京神殿

神殿に行き、先祖たちが受けていたものと同じ祝福を受けてください。そうすれば神権の最高の祝福にあずかる権利が授けられることでしょう。



サンパウロ(ブラジル)神殿

オネイダステーキ部にとっても祝福となっていました。私はこれまでに主の宮居で、みたまの力によって子や孫、甥や姪やその子供たちの結婚式を執行してきましたが、その都度この思い出が脳裏によみがえってきました。

それはかけがえのない思い出で、たびたび回想して見ることがあります。私たちは美しい神殿の中で、安らかな雰囲気のもとに、人生の重要な問題に対する答えを得ることがあります。みたまの力を通して純粋な知識を受けることもあります。神殿は自分自身の問題について啓示を受ける場です。問題や困難の重さに押しつぶされてしまいそうになったとき、私は心にその答えを祈り求めながら、主の宮居へ行きました。そして、非常にはっきりとした形で答えを受けてきました。子を持ち、孫を持っておられる方々に申しあげたいと思います。彼らに神殿について教えてあげてください。

神殿は神聖な場所です。そして神殿の儀式も非常に神聖なものです。私たちの中には、その神聖さのゆえに、子や孫に

神殿について話すのをはばかる傾向がないでしょうか。

その結果、神殿に本当に行きたいという望みを育てていかない人が多く、また、たとえ行くにしても、そこで交わす誓約や義務に対する予備知識をほとんど持たないままに参入してしまう人が多くいます。

私は、適切な予備知識や理解を得させることは、若い人々を神殿参入に備えさせるうえで測りしれない助けになると信じています。その知識は、アブラハムが求めたように自分自身の神権の祝福を得たいという望みを彼らの内に育てていきます。

天父もアダムとイヴを地上に置かれたとき、み前に帰る方法を教えるために、同じようにされました。天父は人を墮落した状態から贖うために救い主を送ると約束されました。そして救いの計画を与え、子供たちにイエス・キリストを信じる信仰と悔い改めを教えよと命じられました。さらに神はアダムとその子孫に、バプテスマを受け聖霊を受けて、「神の御

子の神権」に入れとの命を与えられました。

「神の御子の神権に入る」とは、全きメルケゼデク神権を受けることです。これは神殿の中でしか受けられません。

アダムとイヴはその条件に従ったので、神は「汝は永遠より永遠に亘りて、その寿命始めなく齢尽きざる者の神権を受く」と言われました。(モーセ6:67)

アダムが死ぬ3年前に大切な出来事がありました。アダムは息子のセツ、孫のイノス、そのほか自分の直系子孫である大祭司たちや正しい生活をしてきた子孫らを、アダム・オンダイ・アーマンと呼ばれる谷に連れて行きました。そこでこれら正しい子孫たちに最後の祝福を授けたのです。

このときに、主がみ姿を現わされました。

会衆は立ちあがってアダムを祝福し、彼をミカエル、王の君、天使の長と呼びました。そして主ご自身もアダムに、永遠に子孫の君たるべしと告げられたのです。

そのとき、年老いたアダムは立ちあがり、予言のみたまに満たされて、「何事にも最後の代に至るまでその子孫の上に起るべき事」を予言しました。これらのことはすべて教義と聖約の第107章に記されています。(53-56節)

予言者ジョセフ・スミスは、アダムが子孫を祝福したのは、「彼らを神のみもとに連れ戻すことを願った」ためであると述べています。(ジョセフ・フィールディング・スミス編「予言者ジョセフ・スミスの教え」p.159)

アダムはいかにして、自分自身も含めて正しい子孫たちを神のみ前に連れていくことができたのでしょうか。教義と聖約第107章の次の聖句が、この点を明らかにしています。

「この神権の神権は父より息子に伝うべきを確認されたるものにして、約束を与えられたる選ばれたる人々の正統の子孫に当然附与さるべきものなり。

この神権はアダムの時代に<sup>なだ</sup>始められ、左の如く子孫に相伝されたるものなり。……<sup>しか</sup>而して彼の子孫は主の選<sup>えら</sup>びたまえる民となり、また世の終りまで護<sup>まも</sup>らるべき神の約束を父アダムによりて受けた<sup>ら</sup>り。」(教義と聖約 107:40-42)

アダムは自分の子孫をどのようにして主のみもとへ導いたのでしょうか。

答えはこうです。アダムとその子孫たちは神の「神権の神権」すなわち神権の位に入ったのでした。今の私たちの言い方をすれば、主の宮居に行<sup>い</sup>って、祝福を受けたということ<sup>です</sup>。

聖典の中に言われている「神権の神権」すなわち神権の位は、父から子へと伝えられたことから、族長制度とも呼ばれることがあります。

しかし、この神権の位は、近代の啓示の中では、家族を統治するためのひとつの形態として言い表わされています。この統治形態を通して、男女はちょうどアダムとイヴのように、永遠の結び固めを受け、子孫を得、この世において神のみこころとみ業を行なうために、神との誓約に入るのです。

みずから交わした誓約に忠実な夫婦は、日の光栄の王国の最高の位の祝福を得る権利を授かることができます。今日、この誓約は主の宮居に参入しなければ受け

ることができません。

アダムはこの統治形態に従い、自分の子孫たちを神のみもとへ導きました。アダムこそ私たちが従うべきすばらしい模範です。

エノクもこの模範に従い、当時の聖徒たちを神のみもとへ導きました。

ノアとその子セムも洪水の後に同じ道を踏み行ないました。

神の義なる僕アブラハムは、「義に従う大いなる者」になりたいと望んだと自分で述べているように、この祝福を熱心に求めました。彼は「神権の神権」についてこのように言っています。「この権能は先祖よりわれに授けられたり。そは先祖より伝えられ、時の始めより……今日に至るまで伝えられしものなり。こは誠に長子の権能にして、最初の人すなわちわれらが最初の父なるアダムに授けられ、先祖を通じてわれに至る。」(アブラハム 1:2-3)

アブラハムはさらにこう述べています。「われは、神が子孫に就きて先祖に与えられし任命に従い、われを神権者に任命したまわんことを乞い求めたり。」(アブラハム 1:4)

モーセはこの「神権の神権」について自分の民に教え、「その民神の面を見ることを得んために孜々として彼らを聖くせんことを努めたり。

されどその民その心を頑固にしたれば、神の御前に出るに堪えざりき。故に主の憤り彼らに向って燃えたらば、主は怒りたまひ、彼ら荒野に在る間主の休息に入るべからずと誓いたまへり。この休息とは、すなわち主の無上完全なる栄光なり。

この故に、主はモーセを彼らの中より取り去りたまひ、またかの聖なる神権も同じく取り去りたまへり。」(教義と聖約 84:23-25)

ジョセフ・スミス訳聖書によれば、主はさらにモーセに対して、民の中から神権を取り去り、聖なる神権も儀式も授けられないと言われました。(ジョセフ・スミス訳出エジプト34:1参照)この高度な神権は、それに付随する儀式とともに、イエス・キリストの時代に至るまで、イスラエルから取りあげられてしまいました。

私<sup>が</sup>これらの歴史的背景についてお話ししたのは、この「神権の神権」が初め

から地上に存在してきたものであり、私たちがいつか神のみ顔を仰いで生きるようになるための唯一の手段であることを知っていただくためです。(教義と聖約 84:22参照)

しかし、モーセからキリストの間の時代には、この高度の神権と、人々を神のみもとに導く数々の祝福を受ける権利は、特定の予言者たちにしか与えられていませんでした。そのひとりにエライジャがいます。

エライジャは結び固めの権能の鍵を持ち、多くの力ある奇跡を行ないました。彼は天を閉じ、死者を起こし、干ばつに苦しむ地を救い、天から火を呼び下ろす権能を持っていました。ジョセフ・スミスによれば、エライジャは神権の鍵を持つ最後の予言者でした。

彼はその後、身を変えられ、死を味わうことなく、天に上げられました。身を変えられたエライジャは変貌の山で、救い主が召された使徒たちの長であるペテロ、ヤコブ、ヨハネに、この神権の鍵を回復しました。しかし、間もなくキリストの教会は大規模な背教により崩壊し、神権の祝福は地上から取り去られてしまいました。

この祝福を私たちの時代に回復するには、天の力により新たな神権時代が開かれなければなりません。

1823年に与えられ、教義と聖約第2章として記録に残されている最初の啓示には、神権について次のような約束があります。これは非常に意義のあることです。

「見よ、主の大いなるおそるべき日の来る前に、予言者エライジャの手によりて、われ神権を汝に顕さん。

彼は先祖になされし約束を子らの心に植え、子らの心にその先祖を思わしめん。もし然らざれば、主の来る時、全地はことごとく荒れ廃れん。」(教義と聖約 2:1-3)

エライジャはどのような神権を顕わすことになっていたのでしょうか。バプテスマのヨハネはアロン神権につける鍵を回復しました。ペテロ、ヤコブ、ヨハネは、神の王国の鍵を回復しました。それではエライジャは何のために遣わされたのでしょうか。

予言者ジョセフ・スミスはその理由を、

「それは、彼が神権に関するすべての儀式を執行する鍵」(すなわち結び固めの鍵)を持っていたからであると述べています。(「教え」p.172)

また彼は、これらの鍵とは「メルケゼデク神権とこの地上における神の王国の完まきに関する啓示、儀式、み言葉、権威、エンダウメントの鍵を保有する権能」であるとも言っています。(「教え」p.337)

アロン神権とメルケゼデク神権は地上に回復されていましたが、主はさらに聖徒たちに対して、諸々の鍵を受けるために神殿を建てよと求められました。「神権の神権」が再び地上にもたらされるには、それらの鍵が必要だったのです。これは、「彼来りたもうて、汝らのすでに失いたるもの、すなわち彼の取り去りたまひしもの、すなわち完全なる神権を再び回復したもう土地はこのほか世に一つも」なかったからです。(教義と聖約124：28参照)

予言者ジョセフ・スミスのお言葉をもうひとつ読んでみましょう。「人が神の完まき神権を受けるには、イエス・キリストが得られたと同じ方法でそれを受けなければならぬ。すなわち、あらゆる戒めを守り、主の宮居のすべての儀式に従うことによる。」(「教え」p.308)

かくして初期の聖徒たちの大きな犠牲のもとに、オハイオ州にカートランド神殿が完成しました。

1836年4月30日、主イエス・キリストとほかに天よりの3人のみ使いが、この神殿に現われました。3人のみ使いのひとり、エライジャでした。主はかつてエライジャに「全地が咀くいをもて撃たれざらんがため、先祖の心に子らを思わせ、子らの心に先祖を思わしむる力の鍵を託す」と言われたことがあります。(教義と聖約27：9)

エライジャは諸々の結び固めの鍵を携えてきたのです。それは男性と女性を結び固め、また彼らをその子孫と永遠に結び固め、さらには、アダムに至るまでのすべての先祖と結び固める鍵でした。これがエライジャの顕あわした力、神権であり、神がアダムとその後が続く古代のすべての族長たちに与えられたと同じ「神権の神権」です。

ですから主はジョセフ・スミスに次の

ように言われました。「誠にわれ汝らに告ぐ、汝らの受けたる神権の時代の鍵は、汝らの先祖より伝わりしものにして、ひつきょう天より汝らに伝来せられしものなり。」(教義と聖約112：32)

その後<sup>に</sup>に与えられた啓示の中で、主は次のように説明をされました。「日の光栄には三種の天界、すなわち三種の階級あり。

しかしてその最も高きものを得んために、人はこの神権の位ゐ(すなわち新しく且つ永遠の結婚誓約を言う)に入らざるべからず。

人もし然しかせずんばそれを得ることを得ず。

人は他の天界に入るを得べし。されど、そはすなわちその人の光栄の国の行き止りにして、また殖はゆること能あたわず。」(教義と聖約131：1-4)

子供たちは、主に従い、自分の祝福を受け、結婚の誓約を交わすために神殿に参入するとき、神がかつて父祖アダムに定められたと同じ「神権の位」に入るのです。

また、彼らはこの「位」に入ることにより、主から「彼は最高の榮に進むを得てその王座に坐せり」と言われたアブラハムが得たものと同等の祝福にあずかる権利を授かることができます。(教義と聖約132：29)

主は次のように意味深い言葉を付け加えておられます。「この約束はまた汝の約束なり。汝はアブラハムより出で……。」(教義と聖約132：31)

もう一度強調したいと思います。この「神権の位」に入るには、神のすべての戒めに従い、アブラハムのように、御父の宮居に行くことによって先祖の祝福を求めなければなりません。神殿以外にこれらの祝福を得られる場はありません。

神殿に関するこれらの真理を子供や孫に教えてください。御父の宮居である神殿に行き、先祖たちが受けていたものと同じ祝福を受けてください。そうすれば神権の最高の祝福にあずかる権利が授けられることでしょう。「そはこれなくしては、何人も神の御顔、すなわち御父の御顔を見て生き得る者なければなり。」(教義と聖約84：22)

御父の家は秩序の家です。私たちが神

殿へ行くのは、「神権の位」に入るためです。私たちはそれによって、従順を条件として、御父の持てるすべてを受ける資格を授けられます。主が近代の啓示の中で言われたように、アブラハムの子孫は、神権に対する「正当なる世つぎ」だからです。(教義と聖約86：8-11参照)

主の宮居に参入する資格を持つすべての人にもう少しお話ししたいことがあります。神殿に参入し、主の宮居に関する儀式を執り行なうとき、皆さんには数々の祝福が授けられることでしょう。

エライジャの霊気を受け、心が伴侶、子供、先祖に向くようになります。

家族への愛が一層深まります。

皆さんの思いが先祖に向くとともに、先祖たちの思いも皆さんに向けられるようになります。

また、主が約束されたように天の力を授けられることでしょう。

神の知識の鍵を受けることもできます。(教義と聖約84：19参照)どうしたら神のようになれるかがわかるようになります。そして、神の力の顕あわれを受けることさえできるのです。(教義と聖約84：20参照)

さらに、幕のかなたへ行った人々が「肉においては人間として裁きを受けるが、霊においては神に従って生き」られるようにするために、偉大な奉仕の業に働くようになることでしょう。(死者の贖いに関する示現1：34)

これが神殿の祝福であり、何度も神殿に参入する人に授けられる恵みです。

神よ願わくはイスラエルを祝福し、聖なる神殿を建設した私たちの先祖を祝福したまえ。また、私たちが祝福し、神殿に参入する者に約束されている数々の偉大な祝福を、子や孫に教えることができるようになさしめたまえ。そして予言者エライジャが顕あわせるすべての祝福を受けて、召しと選びとを確かなものとするようになさしめたまえ。

これらの教えが真実であることを心から証し、アブラハム、イサク、ヤコブの神が現代のイスラエルの民に、先祖たちに与えられていたすべての祝福を、天父の宮居において熱心に求める気持ちを授けてくださるようにお祈りします。

(ローガン神殿建設百年記念祭における説教)



# 質疑応答

●本誌の解答は問題解決の一助として与えられたものであり、教会の教義を公式に宣言するものではありません。



動物には霊があるのでしょうか。もしあるなら、動物は死後どうなるのでしょうか。私たちは霊界でペットを飼えるのでしょうか。



解答者

ラマー・ファーンズワース

(ソルトレーク・モニュメントパークステークス部モニュメントパーク第16ワード部、ユタ州ソルトレーク・シティ、ホーグル動物園園長)

**約** 50年間動物と生活を共にしてきて、私はすべての動物には、それぞれ個性があることを信じるようになりました。確かにそれぞれが独特な個性を持っています。同じ種類の動物の中にも、ほかより賢いものがありますし、ある行動を学習するのがほかより早いものもあります。リーダーになるものもおり、また従うことに満足しているものもいます。信頼できるものもあれば、あまり信頼できないものもいます。

高価なる真珠の中のモーセの書2節から4節で、天父はこの地をどのように創造されたかを詳しく述べられました。そして、実際にはふたつの創造があったことを強調しておられます。ひとつは霊の創造であり、もうひとつは肉の創造です。「そはわれ主なる神、わが語りしすべてのものを、これらがいまだ地の面に自然に在るに先だち霊として創りたればなり。」(モーセ3：5)

もしすべての動植物が、この地上に来る以前にまず霊として造られて生活していたなら、それぞれに霊があると考えるのは妥当だと思います。

動物は死後どうなるのでしょうか。動物も私たちと同じように、霊が肉体から離れ、復活を待つ間、霊の存在となるのだと思います。動物も復活すると、古代の予言者も末日の予言者も教えてきました。教義と聖約にはこのように書かれています。

「やがて終末は来り、天地は焼き尽さ

れて過ぎ去り、新しき天と新しき地とあらん。

すべて古きものは過ぎ去り、天地すらも、またその中にあるすべてのものも、すなわち人、<sup>けもの</sup>獣、空の鳥、海の魚も万物ごとく新しくならん。

されど一筋<sup>ひとすじ</sup>の髪の毛、一粒の微塵<sup>みじん</sup>といえども失わることなからん。それらのものは、皆わが手によりて造られしものなればなり。」(教義と聖約29：23-25)


私たちは霊界でペットを飼うことができるでしょうか。

この質問には、ふたつの点から考えることができると思います。ひとつは、霊界でもペットを「所有」することができるかという点です。霊界でまたは復活後も、「私たちの」ペットを所有するというのは、引き続き飼い主となれるかという問題になりますが、これは主のみこころではないと思います。

もうひとつの点は、私たちは天でも動物と一緒に過ごすことができるかということです。そうできることを私は心から望みます。霊界で敵意を抱くことなく動物の友達と一緒に過ごせることは、私には自然で正しいことに思えます。



# 個人の自由について思う



ピアノを弾かないことに対して、私たちは、弾きたいと思わないからだという理屈をつけたがります。しかし実際は、自由に弾けないだけのことなのです。

**私**の町内に、「歩道の王様」と呼ばれている小さな男の子がいます。この子は、自分だけの想像の世界に浸り、ヒーローになったつもりで、黒と金に塗った三輪車で近所を走り回ります。中で

も彼が得意とするのは、その小さな乗り物をいったん自分の家の方にバックさせ、全身の力をたくわえて、一気に道路に飛び出すことです。そしてハンドルを荒々しくきって向きを変え、ペダルを踏んで引き返すのです。近所でこの男の子のことを知らない人はいないほどです。

危険が伴うことを十分承知している両親は、ずっと注意を与え、やめるようお願いさせてきました。そして最近父親は、道路で乗り回すことの危険性を息子にわからせるには、厳しい体罰しかないことに気づいたのでした。男の子は家の中に駆け込むと、すすり泣きながら両親に向かって言いました。「ぼくの楽しみを全部取っちゃうんだね。」4歳の子供には、そうしか取れなかったのでしょうか。

# こと

ロバート・M・ウィルクス



し、何と大きな間違いでしょうか。両親はその子の楽しみを奪うつもりなど毛頭ありません。ただ子供をけがから、ひいては死から守ろうとしただけなのです。ところがその子にとっては、自分のしたいことを、だれにもじゃまも束縛もされずにすることこそが自由だったのです。

もうひとり、私の知っている男の子のことをお話ししましょう。ずいぶん前になりますが、学校から帰って来たその子は、家の中に貸しピアノが置いてあるのを見つけて、母親に尋ねました。

「どうしてピアノがあるの？」

「あなたのためよ。」

「ぼくのため？ どうして？」

「これからピアノを習うからよ。」

その子はピアノを習いたくないと言ったのですが、母親の方はすでにピアノの教師を手配していました。

やがてその子は何度かレッスンをさぼるようになりました。ある日、母親が尋ねました。「ピアノの練習の方はどう？」

「うん、うまくいってるよ。」

「あらそう。ピアノの先生と話してきたところなの。このところずっと来ていないって言ってたわよ。」母親に見つけていたのです。どんな罰を受けるかわかりませんが、レッスンをさぼるのが悪いということはわかっていました。母親が

言いました。「それなら、もうピアノを習わなくていいわ。」

少年はいかにも悪かったというような素振りを見せようとしたのですが、心の中では大喜びでした。「すばらしい罰だよ、お母さん。こんな罰ならいつだって大歓迎さ。」そんな気持ちだったのです。すべてのことから自由になった気分でした。練習やレッスンから解放され、罰や日課、厳しい指導に悩まされることもなくなり、自由の妨げと思えるすべてのものが目の前から払いのけられたのです。

その少年が大人になって、教会のある集会に出席していたときのことで。ひとりの女性が独唱することになっていました。歌う番が来たとき、その女性は説教壇の方へ歩いて行き、こう言いました。「私の伴奏をしてくださる方がきょう来られなくなりました。どなたか伴奏して

親が子供に制限を与えるのは、楽しみを奪うためではなく、子供をけがなどから守るためですが、4歳の子供にはそれが理解できません。

いただけないでしょうか。」それから会衆を見渡し、ピアノの教師をしていた男性に目を留め、「伴奏していただけますか」と言いました。そして、前に出て来たその男性に楽譜を渡しました。

ピアノのレッスンを拒んだ私の友人は、それを見ていてこう思ったそうです。「もし私が頼まれていたら、どうしただろう。もしそうなら、選択の余地などなかった。『できません』と言って断わる以外に。」そのとき初めて気がつきました。母親に「もうレッスンは受けなくていい」と言われて最高の自由を得たと思ったのが、実は自由などではなく束縛だったのです。集会に出ていた彼は、弾きたくても弾くことのできない、いわば手錠をはめられた状態にありました。それに比べ、頼まれたもうひとりの男性は自由でした。なぜなら、引き受けて弾くことも、断わることもできたからです。つまり、自由というものは、許可の問題ではなく、可能性や能力の問題と言えるのです。

私たちは往々にして、自分のしたいことは何でも自由にできるという錯覚にとらわれてしまいます。確かに、大半の人は自分で選んだ能力や技術を自由に伸ばしていくことができます。しかし、それを伸ばして身につけるまでは、私たちにはその力がないわけで、いわば束縛された状態にあるのです。政治的には非常に自由な国にあってさえ、残念ながら不自由な状態に置かれている人が大勢います。自由という原則を誤って解釈すると、せっかくの能力が束縛され、選択の範囲が狭められてしまいます。私たちは、前向きなことや良い結果を生むとわかっていながら、それをしない理由として、やりたいという気持ちがわいてこないだけのことだと、自分に言い訳をします。たとえば、ピアノを弾かないことに対して、私たちは、弾きたいと思わないからだ

という理屈をつけたがります。しかし実際は、自由に弾けないだけのことなのです。次のことを忘れないでください。ひとつのことしか選択する自由がないとしたら、すなわち、弾かないという自由しかないとしたら、それは本当の自由ではないのです。

ニーファイ第二書の「反対のもの」に関する有名な聖句には、私が述べてきた自由というものが出てきます。「それは、すべての物事には必ずその反対のものがなければならぬからである。……もしも物事にその反対のものがないならば、正義も不正も聖潔も憐むべき様も善も悪も生ずることができぬ。それであるから、すべての物事はみな合して一つとならなければならない。故に仮に万物がごとごとく一体となるならば、それは生死なく滅不滅なく幸不幸なく知覚の有無もないまま一切の差別を失ってあたかも死のような有様で存続しなければならない。」(II ニーファイ 2 : 11)

さらにこの章からは、墮落と贖いについて、すなわち人類が自由を得るまでの過程についても学ぶことができます。

「さてごらん、もしもアダムが罪を犯さなかったならば、彼は墮落をせずにそのままエデンの園にいたであろう。そして創造された万物は造られた後の状態そのままに続いてあったに違いなく、また必ずそのまま永久に続いて終りがなかったであろう。

また、アダムとイヴは子供をもうけることもなかったであろうし、それから不幸を知らないから喜びもなく、罪を知らないから善もなさず、そのまま罪が無い状態に留ったであろう。」(II ニーファイ 2 : 22-23)

確かに私たちは、何かから自由になりたいと思うことがあります。しかし、障害や束縛、責任などから逃れるだけが自由ではありません。最大の自由、すなわ



ち神の自由というものは、何かを行なう自由なのです。「私には何を自由が与えられているだろうか」と自問してみてください。エデンの園にいたアダムとイヴは、自分が何かから自由なのかを知って



いました。ふたりはあらゆる不快な事柄や肉体の苦痛から自由でした。しかし、何かをする自由を得るために、理想の地を離れて荒涼とした世界に入ったのです。様々な機会に恵まれている私たちは、常にこう自問してみるべきでしょう。「1年前には自由にできなかったことで、今

できるのは何だろうか。どんな新しい力が身についただろうか。」多くの人は、自由を身につけることより、そこから逃れる方に力を注いでいるようです。1年の終わりに、これまでよりも自由になったと思えなければ、また能力が今まで以上に向上したと感じられなければ、その年はあまり価値のある年とは言えません。皆さんは何を自由にできるようになるでしょうか。何を自由に選べるようになるのでしょうか。自由について、救い主がしばしば弟子たちに言われた言葉を思い出してください。「また真理を知るであろう。そして真理は、あなたがたに自由を得させるであろう。」(ヨハネ8:32)

ほとんどの場合、自由には重荷が伴います。私たちはよく重荷から逃れようとすることがあります。重荷がなくなれば自由になれると思いつているのです。数年前になりますが、秋も深まったある日の午後、私はたき木を集めにトラックで山に出かけました。峡谷の上の道は雪に覆われていて、上に行けば行くほど雪は深くなり、頂上近くでは相当積もっていました。私はトラックを道端に寄せました。ところが、そのとたんに車が雪にはまり込んで動かなくなってしまいました。タイヤの前に転がっている丸太をどかしてみました。しかし車は少しも動きません。辺りはすでに暗くなってきました。「そのうちだれかが通りかかるだろう。それまでにたき木を集めておくとしよう。」私はそう思いました。間もなく、トラックはたき木でいっぱいになりました。しかしだれもやって来ません。「歩いて帰った方がよさそうだ。」私はそう思いました。

しかしその前に、もう一度だけトラックを動かしてみることにしました。ギアを入れると、車がゆっくりながらも確かに道路の方に動き出しました。山積みになったたき木のおかげで、タイヤが空回

りしなくなったのです。荷台が空のときは動かなかった車が、山積みになったお陰で動いたのです。

空にして楽をしようなどと思うべきではないのです。私たちは重荷を取り除くことに力を入れ過ぎる場合がよくあります。仕事が多過ぎると自由がなくなるといふ考えは間違っています。仕事が多過ぎるといふより、むしろ足りないために、ギアを入れてもタイヤが空まわりしてしまう場合の方が多いのです。

確かに、自由には重荷が伴います。また自制が必要なきももあります。私が子供の頃、父は「何々をしてはいけない」と注意を与え、当時の私には理解できない言葉でその思いを表わしました。でも、今ではよくわかります。父はこう言ったのです。「千度『いいよ』と言えるようになるために、一度『いけない』と言うんだよ。」

神は最も偉大なお方です。その理由のひとつは、最も自由なお方だからです。また神は私たちに、ご自分になることを望んでおられます。私たちは時折神から命じられて「できない」ことがあります。しかしその「できない」ことから、「できる」ことがたくさん生まれてくるのです。

皆さんが何かを「する」自由を求め続けていかれますように。何も「しない」自由というのは、最も哀れで痛ましく悲しむべき束縛であることを決して忘れないでください。私たちは神のような能力、可能性を得ることに力を注ぐためにこの世にあるのです。知恵を用いて、熱心にこの機会をとらえていかれるよう、心から願っています。

\*ロバート・M・ウィルクス：アイダホ州レックスバーグ、リックス・カレッジ、レクリエーション教育学部主任教授、6児の父親、現在ステーク部長を務めている。



# 福音を分かち 合う祝福

七十人第一委員会会長会  
カーロス・E・エイシー

**旧**約聖書には、スリヤの王がイスラエルと戦ったことが書かれています。スリヤ軍は2度まで、奇襲攻撃で勝利を得ようと陣を張りました。しかしねらいは外れました。神の人であるエリシャがイスラエルの王に警告し、

スリヤ軍のいる場所を知らせたからです。悩みの種がエリシャであることを知ったスリヤの王は、スパイを送り込んで、エリシャの居場所を突き止めました。エリシャはドタンの町にいるという知らせでした。王は夜の闇にまぎれて馬と戦車の大軍を送り、ドタンの町と住民を囲ん

で、エリシャを捕らえようとした。明け方早くに起き出したエリシャと召し使いは、自分たちが敵に包囲されていることを知りました。おじけづいた召し使いは、「ああ、わが主よ、わたしたちはどうしましょうか」と叫びました。エリシャは自信をもって答えました。「恐れることはない。われわれと共にいる者は彼

「伝道は福音を学ぶ学校、予言者の塾でもあります。」

すべての末日聖徒にあると思います。そのようなときは、エリシャの召し使いと同様に、み業の一部しか見えず、全時間を使って神と隣人に仕えることの祝福と展望に目が開かれていません。そのため、ひとり離れたところで、み業に加わるかどうか思案しているのです。

エリシャが恐れている召し使いのために祈ったように、私も皆さんや未来の宣教師たちのために祈りたいと思います。神によって皆さんの目が開かれ、展望が開かれて、伝道の精神をつかむことができますように。また、召しを受け入れ、真理を分かち、すべての人をキリストに招くことの必要性を心から感じ取ることができますように。そして、より多くの宣教師を求める生ける予言者の呼びかけが切迫していることに気づき、エリシャの召し使いのように、このみ業のまわりを囲む天の軍勢を見ることができますように。

予言者アルマが教えているように、神は人が何を願うのも、また求めるのも許しておられます。(アルマ29：4参照)これは正しい原則であると思います。

私たちがあることを強く願い、心を尽くして求めるならば、おそらく得ることができるでしょう。私たちの固い決意によって内なる力が結集され、天の助けを引き出すことができるからです。

伝道に伴う祝福をより深く理解すれば、皆さんの奉仕したいという望みや意志がきつと強くなることと思います。神はしばしば戒めと祝福を一緒に示されます。たとえば、知恵の言葉には戒めが掲げられています。同時にその戒めに従う人が受ける数々の祝福もあげられています。私は、専任宣教師として伝道する人に与えられるいくつかの祝福について、お話ししたいと思います。すべてをあげることはできません。数えきれないほど皆さんの祝福があるからです。そこで、最も一般的な祝福を取りあげることにしましょう。

その祝福について話す前に、ひとつだ

け注意させてください。予言者ジョセフ・スミスは、重大な時期を迎えたときに、次のような警告を受けました。「かの金版を得るに就きては汝は神の栄光を現わす以外の目的を心に持つべからず、また神の王国を打建てんとする以外の動機に左右せらるべからず。」(ジョセフ・スミス2：46)つまり予言者ジョセフは、神のみ業を行なう際に利己的な動機を抱いてはならないと警告されたのです。利己心は救い主の生涯にも、その教えにも背きます。反対に、無私の心はみ業に純粋さと清らかさをもたらし、みたまを招きます。私たちが自分のことを忘れてこの神聖な召しに携わり、人の救いのみを求めらば、その過程で、予期せぬ祝福や恵みをたくさん受けることでしょう。次にあげるの、その中のほんの一部にすぎません。

## 喜び

次の聖句はほとんどの人が知っています。「而して汝らもし生涯今の世の人々に向いて悔改めを叫ぶことに力を尽し、唯一人の人たりともわれに導かば、わが御父の国に於て彼と共に汝らの喜び如何ばかりぞや。」(教義と聖約18：15)

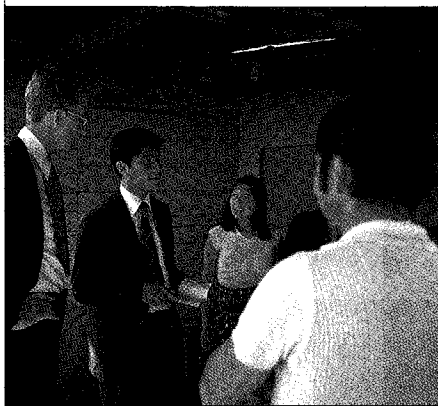
この聖句で言われている「喜び」は、つかのまの感情でも浮わつた快樂でもありません。いつまでも続く深い幸福感です。ヒーバー・J・グラント大管長はこのように証しています。「私は伝道に出ている間に、それ以前にも以後にも感じたことのない大きな喜びを得た。人間が現世にあるのは喜びを得るためである。伝道中に感じたあの大きな喜びは、ほかのどんな喜びにも勝っていた。」(インブルームメント・エラ)1936年10月号、p.659これは、世界中を旅した、しかも教会活動のほとんどの分野を経験した人の言葉です。

アンモンが伝道の経験を振り返ったときの喜びを、聖典から読んでいただきたいと思います。アンモンは特にこのように言っています。「私は喜びが満ち充ちて

らと共にいる者よりも多いのだから。」そしてこう祈りました。「主よ、どうぞ、彼の目を開いて見させてください。」すると若者の目が開かれ、「火の馬と火の戦車が山に満ちてエリシャのまわりに」あるのが見えました。(列王下6：8-18参照)

伝道について恐れを抱くことや、恐れのみ「召しを受けるべきだろうか、伝道に出なければならぬのだろうか」などと自問することは、(老若を問わず)

「伝道はすべての末日聖徒の期待されていることであり、生ける予言者がもっと大勢の宣教師を求めていることは、だれもが知っています。」



心に溢れるばかりであるから、私の神がましますことを喜ぼう。……私が自分の心に感じていることはその万分の一も言えない。」(アルマ26:11, 16) まさに、言葉に尽くせない喜びなのです。

### 良心の安らぎ

良心の安らぎは、正しいことを正しいときに正しい理由で成し遂げた人にもたらされる穏やかな平安です。過ちや罪を犯すとき、霊に安らぎはありません。正しくて善いことを行なうときに、平安がもたらされるのです。良心は不従順な行為によって鈍くもなれば、従順な行為によって鋭敏にもなります。ですから、良心の声を正しく養う人は、ほとんど誤りのない人生を送ることができると思います。

だれもが知っているように、伝道はすべての末日聖徒に期待されていることであり、生ける予言者はすべてのふさわしい若人が伝道に出ることを含め、もっと大勢の人が宣教師になるように訴えています。私たちは、心に銘記されたこれらのことが真実であると知っています。ですから、この戒めに従って召しを受け入れ、実際に仕えない限り、良心の完全な安らぎは得られないのです。

ジョージ・アルバート・スミス長老はこの義務を果たすことについて次のように述べています。「忠実であって求められている義務を遂行する人々は、私たちの理解を越えた平安と幸福を得るであろう。

そしてこの地上での働きを終えたときに創り主のみ前に立ち、みずからの行ないによって創り主に受け入れられるよう備えをするのである。」(「大会報告」1922年4月, p.53)

### 福音の知識が増す

宣教師は毎日個人で1時間、同僚と共に1時間、合計2時間福音の勉強をします。承認されている宣教師の福音学習プログラムに従うだけでも、モルモン経、新約聖書、教義と聖約、そして旧約聖書の大半を何回も読み通すことができます。それに加えて、レッスンプランやそれに関連した教義を身につけながら、福音の基本的な教えを深く学んでいくのです。

宣教師はこれらのレッスンを繰り返し教え、質問や反論に答えていく中で、さらに学習の機会を得ます。教えられるようになって初めて、物事を完全に学習したと言えるのです。実に、伝道は福音を学ぶ学校、予言者の塾でもあります。

### 信仰が増す

ジェームズ・E・タルメージ長老は、次のように述べています。信念は真理を「受け身のかたちで単に同意承認するだけであるが、信仰は行動的積極的であって必ず働きを表わさずにおかぬような信頼と確信とを含んでいる。……すなわち信仰とは生々とした、活気がある、生きている信念である。」(「信仰箇条の研究」p.130)

宣教師の中には、この「信念」によって伝道の召しを受け入れる人がいます。そのような人は教会が真実であり、自分は伝道すべきであるという信念を抱いています。しかしながら、求道者を見つけられるように祈り、教えるときに助けを願い求め、適当な言葉と方法を探して苦勞しながら伝道するうちに、その「信念」はじきに「信仰」に変わるのです。

専任宣教師は、奇跡的な癒しを単に見るだけでなく、実際に経験します。人が罪を捨てて聖徒になるのを目にしま

す。祈りの答えを受け、みたまのささやきを感じ、異言の賜やみたまの種々の働きを見ます。目には見えない力が自分を支えているのを感じます。このような様々な経験が、宣教師の心に信仰の種をまくのです。

### 主に近くなる

私は伝道について考えるとき、ベンジャミン王の次の言葉をよく思い出します。「人はどうしてまだ仕えたこともなく、見も知らず思いもかけない主人を知ることができようか。」(モーサヤ5:13) 私たちは人の救いのために時間や労力を費やして実際に働いてみるまでは、イエスがキリストであることを本当に知ること、救い主のみ業を完全に理解することもできません。なぜなら、人を救うということこそが、救い主の使命だからです。

スベンサー・W・キンボール大管長は、次のように述べています。「神権は人の救いにかかわるすべての事柄を執り行なうために地上の人間に委任された神の権威、権能である。」(『アブラハムの模範』「聖徒の道」1975年12月号, p.529) 神権は、主が私たちを通じて人々を救われる手段です。この力を用いて人を高め、人を救うとき、私たちは力の源であるキリスト・イエスに、より近くなるのです。

### 聖きみたまを伴侶とする

私はトーマス・S・モンソン長老の次の言葉が好きです。「私たちはほかの人と福音を分かち合うとき、当然のこととして自分をまったく離れ、人の祝福について考え、祈り、そのために働く。それだからこそ、聖きみたまによってさらに豊かな祝福を受け、霊的に鼓舞されるのである。」(「エンサイン」1977年10月号, p.11)

聖霊のみたまが、このみ業を推し進めています。聖霊は人々に証をして改宗へと導くお方です。宣教師は聖霊の力の下で教え、求道者はその力に動かされます。



宣教師が伝道地で確立する同僚関係の中で最も貴重なのは、聖きみたまを同僚にすることです。伝道の召しを受けて、神会のこのお方と親しく交わり、その後の人生において常に聖霊を伴侶として導きを求めてください。

## 証が強まる

私は何年も前に監督をしていたとき、ある青年に伝道に出るように勧めました。ところが断われました。私は予想もしていなかったので、大層驚きました。彼は、自分には証がないと言いました。証がないのに伝道するのは偽善だと考えたのです。半年後に再び話をしましたが同じ返事でした。しかしこのとき、私はみたまの導きを受けて、次のように尋ねました。

「いくつか基本的な質問に教えてください。天の神は実在していますか。」

「ええ、もちろんです。神がおられると信じていなければ、祈ったりしません。」

「ありがとう。では、イエスはキリストですか。」

「はい、当然です。その事実を疑ったことなどありません。イエスは神の御子で、私の救い主です。」

「ジョセフ・スミスは回復の予言者ですか。」

「はい、そうです。監督。ジョセフ・スミスが神から神聖な使命を受けて働いたことは確かだと思います。」

「もうひとつ、質問があります。デビッド・O・マッケイは現代の予言者ですか。(何年も前のことでしたから)」

青年はにっこりと笑うと、「いつ、出かけましょうか」と聞き返してきました。彼はずっと証を持っていたのです。ただ、証とは何で、どう言い表わせばいいかを知らなかっただけなのです。

宣教師は、教えては証し、教えては証します。そのたびごとにみたまを受け、語る真理は心のうちにどんどん深く浸透し、口にする証はますます鮮明に、そし

て力強くなっていきます。

## 罪の赦し

スペンサー・W・キンボール大管長は、次のように述べています。「私たちの罪は、私たちが自らの身と霊をキリストに委ね、確固として世の人々に証を述べる時、一層速やかに赦される、と主は言っておられる。」(『隣人を警むる責任あり』「聖徒の道」1977年11月号、p.559)

ヤコブ書にはこう書かれています。「わたしの兄弟たちよ。あなたがたのうち、真理の道から踏み迷う者があり、だれかが彼を引きもどすなら、かように罪人を迷いの道から引きもどす人は、そのたましいを死から救い出し、かつ、多くの罪をおおうものであることを、知るべきである。」(ヤコブ5:19-20)

私は数年前、オーストラリアの伝道部大会で忘れられない経験をしました。その大会でひとりの青年の顔がすばらしく輝いているのを見て、私の妻は「あんなに真理にあふれて輝いている人を見るのは初めて」と言いました。

集会が終わって、私がまだ段から下りないうちに、その青年がやって来て言いました。「エイシー長老、少しお話しして

もよろしいですか。」私が「監督室で待っていてください。すぐまいりますから」と答えると、彼は出口に向かって通路を歩いて行きました。

私が監督室に行くと、青年は私を見て言いました。「エイシー長老、私のことをお忘れですね。」私は大変申し訳ない気持ちになりました。「ええ、どうも思い出せません。お許しください。」

すると青年が言いました。「私は何年前に、監督とステーク部長と一緒に、長老の事務所をお訪ねしました。高校で愚かなことをしてきたためです。神権者としてふさわしくない行為でしたので、伝道に出る前に、特別な悔い改めと承認が必要でした。私が犯した罪をリストにしてお渡ししたら、長老は『伝道の許可は与えられません』とおっしゃいました。覚えていらっしゃるいませんか。」

それで思い出しました。私がそのようなことを言ったのは、彼ひとりだけでした。あのとき青年は泣いていました。監督もステーク部長も泣きました。そして必死になって懇願してきました。私はついに譲歩して言いました。「では、ふたつの条件つきで許可しましょう。ひとつは、これからすべての戒めを厳格に守ること



「宣教師が教え、証する間に、  
語る真理は心のうちにどんどん  
深く浸み込んでいきます。」

です。決してごまかしてはいけません。  
もうひとつは、召された伝道部で一番の  
宣教師になるように頑張ることです。」

青年は私の記憶をすべて呼び戻してから、  
こう言いました。「エイシー長老、長老が  
来られると聞いて、とても楽しみにして  
いました。来週、伝道を終えて家に帰  
ります。私はこの2年間、規則や戒め  
のひとつも曲げたり破ったりしません  
でした。そのことをお話ししたかったの  
です。」そしてさらに言いました。「私は  
伝道部で一番の宣教師ではないかもしれ  
ません。でもそれに近いと思っています。」

私は心を打たれました。彼を抱き寄せ  
て、感謝しました。青年はひとすじ、ふ  
たすじと涙を流し、出口に向かいかけ  
ましたが、そこで立ち止まり、再び私を見  
つめて言いました。「エイシー長老、ほん  
とに長い年月の間で今初めて、自分が道  
徳的に完全に清いと感じています。」私は  
答えました。「そのとおりです。伝道とい  
う奉仕によって清められたのです。さあ、  
家に帰って、ずっと清い生活をしてくだ  
さい。」

彼はそれから神殿で結婚し、今は父親  
となって、専門職の資格を取得しようと  
励んでいます。

近代の使徒であるジョージ・F・リ  
チャーズ長老は、こう約束しています。  
「私は主のみ名によってお約束したいと  
思います。伝道の召しを受け入れてみ業  
のために献身するならば、皆さんは、主  
から過去の罪を赦され、まったく清い状  
態で生活を始めることができるのです。」  
この約束を願わない人がいるでしょうか。

### 人格の向上と洗練

十二使徒評議員のスティープン・L・  
リチャーズ長老は、伝道が末日聖徒に及  
ぼす影響について次のように語っていま  
す。「男性や女性の土台をなす人格が向上  
してきました。犠牲を払うことによって  
自制心を身につけ、与えることによって、  
当然のことながら、寛大な心を養ってき  
ました。また様々な徳について教えるこ

とによってみずから徳を行なうようにな  
り、高い霊性によって証と心の成長をう  
ながしてきました。」(「大会報告」1945年  
10月)まったくそのとおりです。

人格というものについて私の考えが間  
違っていなければ、それは長年にわたっ  
て自分が培ってきた習慣や性癖をその一  
部としています。伝道地で身につけるこ  
とのできる習慣や性向、性質、美德につ  
いて考えてみてください。そうした習慣  
を自分のものとした宣教師の表情に、す  
ばらしい人格の輝きを見たことのない人  
がいるでしょうか。また、ほんの何カ月  
かの短い伝道期間に起きた成長を、自  
分の目を見たことのない人がいるでしょ  
うか。

### 平和をつくり出す人になる

救い主はこう言われました。「平和をつ  
くり出す人たちは、さいわいである、彼  
らは神の子と呼ばれるであろう。」(マ  
タイ5：9) N・エルドン・タナー長老は  
次のように述べています。「もしこの教会  
のすべての会員が今日の予言者の呼びか  
けを受け入れ、福音に従って生活し、天  
父の戒めを守り、実際に宣教師となるな  
らば、万国の政府や軍隊の力を動員する  
よりも、平和のためにはるかに大きな貢  
献ができるでしょう。」(「大会報告」1962  
年10月)

最大の平和運動は、主の代表者である  
専任宣教師たちの活動なのです。

### 奉仕の実行

皆さんはベンジャミン王の教えをご存  
じのことと思います。ベンジャミン王は  
特に奉仕についてこう語りました。「お前  
たちが同胞のために務めるのは、ただお  
前たちの神のために務めるのである……。

また、たとえ〔神〕に、全身全霊の力  
をつくして仕えても、お前たちはそれで  
もまだ益にならない僕である。

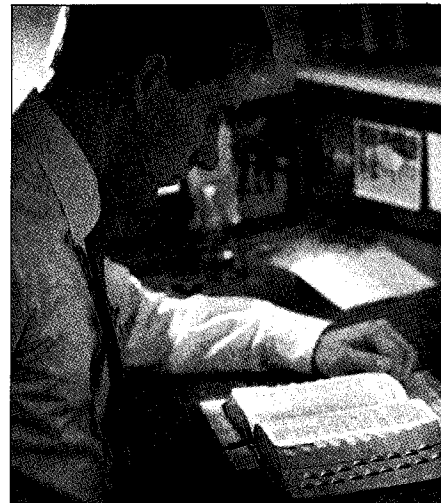
神はお前たちを造って命を与えたもう  
た。それであるからお前たちは神に恩を  
受けている。

次に、神はその命令通りに行えとお前  
たちに要求をなさる。もしお前たちが神  
の命令通りに行うならば、神はその従順  
さをほめて直ぐに祝福を与えてこれに報  
いたもう。それであるから、お前たちは  
今でも神に恩を受けているばかりかこれ  
から先とこしえに恩を受けている。それ  
であるから、お前たちは何を誇りとする  
ことができようか。」(モーサヤ2：17、  
21、23-24)

### 人々への愛と理解が深まる

私はだれにも負けないほど、アルメニ  
アの人々を愛しています。なぜでしょう  
か。彼らの中で伝道したからです。言葉  
も少し勉強しました。歴史を学び、幾人  
かの救いのために努めました。私は心か  
らアルメニアの人々を愛しています。

医師として働いているある帰還宣教師  
は、伝道に出るために学業を中断したの  
ですが、自分の考えをこう話しています。  
「専任宣教師として伝道することによっ  
て、人々に対する愛と関心が深くなりま  
した。知性だけでは不十分です。……知  
性に、人類に対するキリストのような愛  
が加わってはじめて、尊敬される立派な医  
師になれるのです。」(ローズマリー・ベッ  
ク『帰還後の生活』「タンブリ」1981年2  
月号) 宣教師は伝道を通じて人々への愛  
と理解を深めています。





## 永遠の友情を築く

どの宣教師も少なくとも5、6人の同僚と生活し、働く特権を得ます。共に食事をし、祈り、教える中で、特別な友情が培われます。生涯の友が得られることもあります。

私の管理していた伝道部に、伝道生活になかなか適応できない長老がいました。私はその長老のためによく考えて同僚を選びました。ふたりは互いに欠けているものを補い合いました。同僚に自分の良い性格や強さを吹き込み、伝道を終えて帰るときには、ふたりともはつらつとして力にあふれ、神に仕えたいという望みに燃えていました。帰還してから数年後に、そのうちのひとりが深刻な家庭問題に悩んでいることを耳にしました。私に何かできることはないかと調べてみたところ、以前の同僚がすでに連絡をとり、必要な援助をしていることがわかったのです。

宣教師が、福音を教えてバプテスマを施した人との間に築く永遠の友情について考えてみてください。私はテキサスで経験したことを忘れることができません。

伝道を終えて帰還する長老を面接のために本部へ呼んだときのことです。その長老は、自分が教えてバプテスマを施した兄弟に連れて行ってもらっていいですかと尋ねました。

ふたりが着いたとき、私は伝道本部にいました。ふたりは見るからに強い絆で結ばれていて、話は尽きないようでした。私はあとの予定が詰まっていたし、その面接は必ずしなければならないことでしたので、少しいらいらし始め、部屋に入るように宣教師を促しました。改宗者を見つめる宣教師の目に涙があふれてきました。「ここまで連れて来てくださって、ほんとにありがとうございました。」すると改宗者が即座にこう言いました。「いいえ、長老、私の方こそ、導いてくださってありがとうございました。」何と貴い言葉でしょうか。ふたりの間には、何とすばらしい愛があるのでしょうか。

伝道地で同僚や改宗者との間に築く友情は、永遠のものとなるのです。

## 忘れ得ぬ経験

キンボール大管長は、伝道を「大冒険

と呼びました。伝道は心はずませ、胸をわくわくさせる仕事であり、気高い勇気を必要とする、冒険に満ちた事業です。

以前ある映画のポスターに、「史上最大の脱出冒険物語」と書いてあるのが目に留まりました。そのとき私はこう思いました。「冒険というものがかわかっていない。人々を罪という束縛から助け出し、霊の死の淵から連れ戻し、悪の力と戦い、神の軍勢に加わって行動するまでは、冒険とは何かがわかるはずはない。」主のみ業の中で専任宣教師として働くこと以上に大きな冒険も、胸躍る仕事も、感動的な経験もありません。

## 民を備える

150年以上も前に予言者ジョセフ・スミスに与えられた啓示の中に、次の言葉があります。「神の王国の鍵はこの世の人の手に委任され、福音はここより転じてきて世の果にまでも達せん。あたかも人手によらず山より切り出されたる石の転がり出でて、ついに全世界に充ち満つるが如し。……」

これを以て、願わくは天の王国の来らんため、まず神の王国を出で行かせたまえ。」(教義と聖約65:2,6)

予言の成就の一翼を担えるとは、何とすばらしい特権と選びにあずかっていることでしょうか。王国の建設を助け、救い主の再臨に備えて働けるとは、何と名誉なことでしょうか。王国を築き、キリストの再臨に備えること以上に急を要する重要な仕事はありません。

## 指導者となる訓練

教会の中で、伝道ほどその力が持続する経験は、あったとしてもまれでしょう。たとえば、最近の調査によると、帰還宣教師の91パーセントは月に3回以上聖餐会に出席し、89パーセントは何かしら教会の責任を受け、95パーセントは神殿結婚しています。

その結果、帰還宣教師は教会において、特に発展途上国において、貴重な指導力

「伝道地で同僚や改宗者との間に築く  
友情は、永遠のものとなります。」



を發揮しています。

最近、私は妻を連れて南米コロンビアを訪問しました。そして新しいステーク部長の適任者を主が啓示してくださるようお願いしながら、数人の男性と面接しました。召された人は30歳にも満たない帰還宣教師でした。わずかの年月の間に様々な経験を積み、霊的な経験もしてきました。伝道に出て、伝道部の指導者としても働きました。奉仕し、指導する備えができていたのです。

### 永遠の生命

神から授かるあらゆる賜のうち最大のものは、永遠の生命です。私はジョージ・アルバート・スミス長老の次の言葉が好きです。「私たちの多くは、世を去るときに置いていかなければならないこの世の物を求めることに大半の時間を費やしています。しかし、私たちの周りには、

もしその気になれば、福音を教えて真理を探求する気持ちを起こさせ、神が生きておられることを悟らせることのできる不滅の魂が存在しているのです。これほど貴重な宝が世の中にあるのでしょうか。私たちはこの世で彼らの感謝を受け、来るべき世では永遠の賞賛を受けるのです。」(総大会1916年10月)

さらに私の理解するところでは、奉仕する人々や救いの業を手助けする人々も永遠の生命を受け継ぐ候補者となります。私たちの救いは他の人の救いと深くかかわっています。手を差し伸べて人を引きあげてこそ、天に向かう望みを持つことができるのです。永遠の生命に至る道はただひとつです。ほかの人がその道を見つけて歩めるように助けるときに、私たちもしっかりとその道をたどることができるのです。

救い主のこの約束を心に留めてくださ

い。「おおよそ、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受けつぐであろう。」(マタイ19：29)

これまで伝道に伴う17の祝福をあげてきました。しかし祝福はまだ多く、数えあげればきりがありません。伝道に新たな目を向け、その召しに応えられるようにみずからを備えるならば、これらの祝福がすべて自分のものになることを、どうか理解してください。

キンボール大管長は言っています。「伝道活動は、什分の一と同様に、豊かな祝福をもたらします。それはマラキの言うように、あふれるばかりの恵みです。(マラキ3：10参照)」(韓国地域大会1975年8月)

伝道は皆さんにとって最も価値ある仕事です。もし主が今、皆さんの前に立てられて面接をされるとしたら、特にこう言われると思います。「あなたにとって最も価値あることは、人々に悔い改めを宣べて、人々を私のもとに導くことです。」(教義と聖約15：6参照)

この話の最初に、予言者エリシャと召し使いのをお話ししました。再び旧約聖書に戻りたいと思います。エライジャが自分の使命を果たし終えたとき、後継者であるエリシャにこう告げました。「わたしが取られて、あなたを離れる前に、あなたのしてほしい事を求めなさい。」するとエリシャは言いました。「どうぞ、あなたの霊の二つの分をわたしに継がせてください。」(列王下2：9)

皆さんのうえに伝道のみたまが2倍注がれて、このみ業が急を要することを理解し、もたらされる祝福を心に描くだけでなく、意を決して伝道に赴き、純粋で清らかな奉仕をされますように心から祈っています。

(この話は、1984年9月20日ユタ州プロボで開かれた、これから宣教師になる人のための大会における説教を編集したものです)

●スペイン語を語り聖徒を対象とした文芸作品コンクール、第1位受賞作品●

# 主が私を遣わしてくださったのです

パティ・ラーゴ

アリアナはゆっくり歩道を歩いて行きました。朝のこの時間はどこも急ぎ足で通り過ぎる人々であふれています。仕事に向かう人もいれば、子供たちを学校へ送って行く人もいます。交差点は車で混雑し、目的地に間に合うようにと急ぐドライバーは、いらだち始めます。

アリアナは娘のサンドラを学校へ送り届けたところでした。スクールバスもあるのですが、こうして毎日、自分で娘を連れて行くことにしているのです。朝の散歩も、娘を迎えに行く夕方の散歩も楽しみのひとつでした。それはまた、サンドラと共に過ごす貴重な時間でもありました。

ふたりは歩きながらいつもおしゃべりをしました。サンドラは、話すことが山のようにあり、小さな秘密を打ち明けたり、よく笑い声をあげたりしました。この小さな子供が、アリアナの前にわくわくするようなまったく新しい魅力的な世界を広げて見せてくれるのです。

ところが、きょうは、朝から疲れて、ちょっと悲しい気持ちさえしていました。というのも、夫がここ数日間家を留守にしているため、妻として母親として、また教会の召しを果たす者として受けるはずの慰めと支えを失っていたのです。しかもふたり目の子供を身ごもっていました。

アリアナは笑顔でその婦人に声をかけました。「あの、席が空きましたよ。」  
「ああ、どうも……。」婦人はそう口ごもりながら隣に座りました。

アリアナは、しなければならないことがあまりにたくさんあるのに気が重くなり、疲れきって家まで帰り着けそうにありませんでした。元気よく歩くことは、彼女の運動プログラムのひとつなのですが、今朝はどういうわけかその気になりませんでした。家までがとても遠く感じられて、歩けそうになかったのです。アリアナは次のバス停でバスを待つことにしました。そうは決めたものの、沈んだ気分はちっとも暗れず、悲しい思いのまま、なお歩く気持ちにはなれませんでした。ふと夫のことを考えました。今頃は遠い見知らぬ道を運転しているのでしょうか。仕事柄、夫は遠くまで出かけることが多いので、何か悪いことが起きはしないかといつも心配でした。

それにラーゴ姉妹のことも気がかりでした。彼女は肝炎でほとんど床についたままなのです。アリアナは彼女の訪問教師なので、自分の仕事をおろそかにせず

にどうやってラーゴ姉妹をもっと助けることができるかと考えました。次に思ったのは3日ばかり風邪で具合の悪い娘のサンドラのことです。医者に連れて行くべきかどうか迷っていました。

それから頭に浮かんできたのは、母親のことです。ずっと手紙も書いていませんでした。子供たちが皆成人し独立しているので、アリアナの両親はきっと寂しい思いをしているに違いないのです。

このような思いが次々と心に浮かび、さらにその日のうちに、また数日間にしなければならないいろいろな仕事のことを考えると、ますます重い気分になりました。そして、こんなとき頼りになる夫が家にいてくれればと思うのでした。

込み合うバスの中に立ちながら、アリ



アナはほかのことを思い出しました。サラダに入れるトマトを買い忘れていました。歩いて帰っていれば、途中で買えたのです。バスは何軒かスーパーマーケットの前を通りましたが、止まってくれませんでした。

さらに一層憂うつになったアリアナは、ため息をつきました。そのとき、ふと左の方を見るようにという気持ちを感じ、目を向けました。すると、すぐそばに立っていた女のひとと目が合いました。ちょっと戸惑いながらアリアナは笑いかけました。その見知らぬ女性はほんの少し笑みを見せたものの、またすぐ別の方を向いてしまいました。

アリアナはまたトマトのことを考えました。「ひとつ手前のバス停で降りて、アールフレイズのお店で買いましょう。そこからなら家も遠くないし、歩いて帰れるわ。」そう思っていると、座席がひとつ空きました。アリアナが急いで座ろうとすると、偶然にも先ほど目が合った婦人とはち合わせしました。

「すみません。」ふたりは同時に言いました。

「どうぞお座りください。」アリアナが言いました。

「いいえ、あなたこそどうぞ。」その見知らぬ婦人が遠慮して言いました。

アリアナはお礼を言うと、心からうれしく思ってその空いた席に腰を下ろしました。走り続けるバスの中で、アリアナはちょっとその婦人の方を見ました。さっぱりした身づくろいですが、疲れたような悲しい目つきをしていました。明るい茶色の目の下には、大きなくまがありました。その婦人が急にこちらを向きました。アリアナはもう一度ほほえみかけました。けれども今度は、彼女の方を見つめていたことを知られたと思い、少しうろたえてしまいました。アリアナは窓の外の朝の通りに目をやりながら、考えました。「きょうは何かほかにすべきことがあるような気がするのなぜかしら。」その気持ちがいつまでも消えないのです。もちろん、トマトのことではありません。

それから数分経って隣の席が空きました。アリアナはすぐに笑顔でその婦人に

声をかけました。「あの、席が空きましたよ。」「ああ、どうも……。」婦人はそう口ごもりながら隣に座りました。アリアナはその婦人に目を向けるたびに、向こうでもこちらを見ているのに気づきました。そこで話しかけてみることにしました。

「秋はとても過ごしやすいですね。」婦人はあまり話をしたくなさそうでしたが、アリアナは心に温かい気持ちを感じました。そして相手を力づけるつもりで、自分が忘れっぽいこと、そのせいできょうもトマトを買い忘れ、途中から家まで歩いて帰らねばならないことなどを話しました。

すると婦人が言いました。「もしよろしかったら、うちのトマトをお譲りしましょうか。庭で作っているんですが、でき過ぎて困っているんです。」

「まあ、それはよかったわ。」アリアナはうれしそうに答えました。「家で取れるものってずっとおいしいですものね。」

その婦人の家が、自分の降りるバス停から3つ先だと言われ、アリアナは一瞬ちゅうちょしました。自分の家を通り越し、トマトを抱えて戻って来なければならぬのです。ずいぶん時間もかかるでしょう。特にすることがたくさんある日に、時間を無駄にはしたくありません。でも、せっかく好感を持ち始めたこの婦人を、怒らせたくないと思い、一緒に行くことにしました。バスを降りる前に、この婦人の名前がテレサであることを知りました。アリアナは庭のある小さな家の立ち並ぶ通りと一緒に歩いて行き、質素ながらも清潔でよく手入れの行き届いた家の前に来ました。

「まあ、すてき。」アリアナが感激の声をあげました。「私、ずっと庭のある家が欲しかったんです。今はアパート暮らしでしょ。なんだか鳥小屋にいるような気がして。」

テレサは笑顔は見せたものの何も言わず、アリアナを家の裏の方に案内しました。そこには小さな庭がありました。ふたりはトマトを取り、テレサが用意してくれたカゴの中に入れました。トマトを取っているうちに、テレサは次第に打ち解けてきて、前よりもよく話すようになりました。彼女は最近未亡人になり、ひ

とり娘が生計を立てるために学校をやめて工場に働きに出ているということでした。

小さなカゴがトマトでいっぱいになりました。少し疲れて、背中が痛くなってきました。テレサが言いました。

「帰る前に、家に入って温かいものでも飲んでいらっしゃいませんか。」

アリアナは絶望的な気持ちになりました。「時間がないわ！ もうこれ以上時間を無駄にできない！」でも、何かに促されてこう言いました。「ええ、喜んで。」

それから数分後、ふたりは湯気の立つココアのカップを手にしながら、台所のテーブルに向かい合って座っていました。テレサは少しずつ自分のことを話し始めました。

「バスの中で目が合うなんて、おかしいわね。」彼女は笑いながら言いました。「今までそんなこと、一度もなかったわ。いつもひとりぼっちだったわ。本当にひとりぼっち……。」

突然彼女の目が曇りました。アリアナはそこに深い悲しみと苦しみを見たような気がしました。テレサは、結婚当初から経済的に苦しい生活をしてきたことを話してくれました。また、たびたび失業したこと、娘に教育を受けさせるために夫婦で苦勞してきたことなども話してくれました。その娘が今、学校を途中でやめ、奴隷のようにこき使われているのです。それからテレサはもっと深刻な顔つきになり、まるでひとりごとを言うように、「ときどき神様に見放されたように感じるのはどうしてでしょう」と尋ねてきました。神様からも、そして世界中のだれからも愛されていないような気がすると言うのです。彼女の口元のしわは一層深くなり、目つきは陰しくなりました。

アリアナは、必死で何か言おうとしました。福音の中から、この悩んでいるやさしい女性にふさわしい話をすることができません。この婦人が現実にもってきた重荷の前に、どんな慰めの言葉もむなしなものに思えたのです。

テレサは目を伏せながら言いました。「どうしてこんなことを、あなたに話し

てしまったのかしら。」

そのとき、アリアナの口をついて言葉が出ました。「主が私を遣わしてくださったからです。」なぜそんなことを言ったのか自分にもわかりませんでした。

するとテレサが急に泣き出しました。アリアナは慰めの言葉をかけなくてはと思いましたが、すぐに、それは感謝の涙であることがわかりました。

少し気を取り直すと、テレサが言いました。「何かか信じられない。実は夕べ夢を見たの。とっても不思議な夢で、どこか暗い所を歩いていたわ。どこへ行こうとしているのか自分でもわからずに。足元には真っ暗な穴が口を開けているような気がしたの。そのとき突然、私の前にひとりの女性が現われたのよ。何か特別

な光に包まれているようで、だんだん私の方に近づいてきたわ。私は希望に満ちてその光を待ち受け、そしてこう尋ねたの。『どうしてここへ来たのですか。』すると……』テレサの声が急に高くなりました。「アリアナ、その人は今あなたが言ったのと同じ言葉で答えたのよ。『主が私を遣わしてくださったからです』って。」

ふたりは黙って顔を見合わせました。アリアナの心には平安が満ちていました。

「汝らまた預め何を言わんと憂うることなかれ。ただ終始生命の言を心に蓄うべし。さらば必要の時に当り、すべての人に適いたる言うべき言を与えらるべし。」(教義と聖約84:85) まさしくそのとおりにになりました。みたまによる霊

感を受け、まさしくテレサに必要なことを語ったのです。

「あなたのことをもっとよく知りたいわ。」テレサが言いました。「ぜひお友達になりましょうね。」

アリアナは彼女の手を取り、やさしく言いました。「主は決して見放されないといいことがおわかりになったでしょ。」

「どちらか教会に行ってらっしゃるの？」テレサが興味深げに尋ねました。アリアナが話し始めると、テレサはとても熱心に耳を傾けました。そして次の家庭の夕べに招待すると、娘と一緒に必ず行くと約束してくれました。

「ずっと光を求めていたんです。」席を立ちながらテレサがつけ加えました。

ふたりはほほを寄せて別れのあいさつを交わし、それからアリアナはバッグとコートを取り、トマトを手を持ちました。通りに入るやアリアナはほっとし、新たな力がわいてきました。「本当に、人につくさなければ幸福は得られないわ。これこそ、幸福になる秘訣なんだわ。」

大分時間が経ち、昼食の支度も遅れてしまいました。アリアナは次から次へと計画を立てました。おいしいサラダを作ってラーゴ姉妹のところへ持って行って一緒に食べよう。そして小児科医に予約をして、できるだけ早くサンドラを診てもらおうことにしよう。そうすれば安心だわ。晩には、夫のホテルに電話し、夫を励ましてこう言おう。「いつもあなたのことを考えているの。愛しているわ。」それからサンドラを寝かしつけ、ベッドに入る前にお母さんに手紙を書こう。ずっと前から頼まれていた料理の本も送ってあげよう。

喜びが胸いっぱい広がりました。歩道で信号が青になるのを待っているとき、何かすべきことがあるという気持ちが消えているのに気づきました。アリアナはみたまのささやきに聞き従って、神の国を第一に求めました。そのためにほかのすべてのものが添えて与えられたのです。  
\*パティー・ラーラ姉妹は通訳を仕事とする改宗者で、スペインのカディツ地方部ロータ軍人支部に所属し、支部と地方部で責任を受けている。この話は実際にあった出来事を元に書かれたものである。



アリアナは彼女の手を取り、やさしく言いました。  
「主は決して見放されないといいことがおわかりになったでしょ。」

# 「モルモン経は 確かに神様の み言葉です」

ジェラルディン・ピゴット・ゴールドディング

ふたりの若い女性が、私たち家族の生活に何にも代えがたいすばらしい影響をもたらしてくださったのは、今から28年前のことです。

私たちはテキサスのとある小さな美しい町に住んでいました。私は当時集っていた教会の活発な会員で、聖歌隊の役員をし、日曜学校で教え、キリスト教徒の奉仕団体に働いていました。仲間の信徒や隣近所の人たちとも親しくしていました。小さな家を買ひ、下は生後数カ月から上は10歳までの、4人のかわいい子供に恵まれていました。

我が家の台所の窓からは1ブロック先の通りが見えますが、その通りを隔てた向こう側で、何かの建築工事が始まりました。何の建物かわかりませんでした。私はなぜか興味がわき、毎日洗い物をしながら、窓越しに工事の進み具合をながめていました。近所の人たちも関心があるらしく、それがモルモンの教会だとわかったときは、とても驚いていました。私自身、この近くにモルモン教徒がいることさえ知らなかったのです。

何カ月かが経ち、町角に小さな教会が完成しました。小さいながらも、肌色の石造りのすてきな建物でした。そこに入りする人たちを見ると、案に反して、ロングスカートやおかしな形の帽子など、前時代風な姿をした人はひとりもいませんでした。みんな私たちと同じような格好なので、少々あてがはずれた感じでした。

ある日のこと、玄関のドアをノックする音がするので、出てみると、小ざっぱ

りとした服装の若い女性がふたり立っていました。私はどうぞと中にお招きして、人の良いテキサスっ子らしく、さっそくコーヒーはいかがと尋ねました。するとおふたりは丁寧にそれを断わり、すぐに父なる神と御子イエス・キリストについて話し始めました。耳にするのが始めての話もありました。神は体、つまり実際に骨肉の体をお持ちで、私たちと同じような姿をしておいでだということです。何と、心から愛する神様が人間のような姿をしておられるとは。神への冒瀆のよう<sup>ぼうとく</sup>にさえ感じられました。私は玄関でさようならを言いながら、心の中で思いました。「すばらしい娘さんたちだけど、考えていることはおかしいわ。あなたがたの教会は間違っている。それを心底信じているのね。」

翌週の同じ頃、また玄関をノックする音がしました。同じ娘さんたちでした。家に招き入れて、またコーヒーを勧めると、おふたりはこのときも感謝しながら断りました。そして話を始めました。それが終わると、私は玄関まで見送りしました。このときは、現在も予言者がいるという話でした。それを聞いて私は、つい大きな声でこうやってしまいました。

「あなたがたを導く予言者がいると信じられて、さぞご安心のことでしょうね。」すると、そのとおりですという答えが返ってきました。私は心の中で思いました。「こんなに強い信仰を、この教会はどうやって植えつけるのかしら。」

次の週に、またおふたりがやって来ました。「ほんとにコーヒーは召しあがらな

いのね。」「はい、どうもありがとうございます」と今度は丁寧な返事でした。驚いたことに、このときは夫が部屋に入って来て、私たちの話を聞きました。

それから毎週集まりがありました。おふたりは夫と私にいろいろなことを話して行きました。ネブカデネザルの夢の話、人手によらずに山から切り出される石の話、エレミヤの予言、ひとつとなるはずの2本の「木」について。それらはみな読んだことがありました。私は聖書が好きで、とても大事にしていましたし、子供のときから親しんできました。毎晩寝る前に1章ずつ読んでいたので、おふたりが話してくれたことの中には、知っている話もありました。それが今や論理的につながっていくのです。胸がはずみました。

その頃は子供たちも話に加わり、最初に訪れたふたりの姉妹は別の姉妹宣教師に変わっていました。私は赤ん坊をベビーサークルに入れてから、宣教師に次々と質問を浴びせました。その結果、予言に記されている2本の木は聖書とモルモン経であることがわかりました。「モルモン経は読めるのですか。いつ、いつ読めます？ 来週ですか。」長い1週間になりそうです。どうにも待ちきれそうにあ

台所の窓から、通りの向こうで行なわれている建築工事を見ていました。それがモルモンの教会だとわかったときは、とても驚きました。





りません。

本当に長い1週間でした。モルモン経のことがいつも頭にあって、それを手にするたびに待ち遠しくてたまりませんでした。ようやくその日になっても、姉妹たちがモルモン経のことを忘れなければいいけれど、と心配しました。そればかりでなく、今度こそコーヒーと一緒に飲んでくれるかもしれないと考えたりもしました。

モルモン経のことについて話し合っていたとき、姉妹たちはその中に書かれているすばらしい約束について教えてくれました。そうです。試してみるのです。モルモン経について祈るのです。

モルモン経が真実なものであると確信するのに、私にとってはただ数ページを読むだけで十分でした。モルモン経は真実です。神様のみ言葉です。私はそれから毎朝6時に、裏口の階段の所にコー

ヒーを持って出て、子供たちが目を覚ますまで朝の冷気の中でモルモン経を読みました。その言葉から何と強い力を感じたことでしょうか。この書物を読んで、それが神様のみ言葉であることをだれが否定できたでしょうか。モルモン経は確かに神様のみ言葉です。私は胸の高鳴りを感じ、新しい発見をし、畏敬と、驚きと、温かい気持ちを覚えました。

まだレッスンは3回以上残っていた頃です。集会が中断されました。4歳の娘のナンシーが、小児麻痺のような症状を訴えたのです。私はその頃もなお、気が進まないながらも、自分の通っている教会で教師をしていました。しかしその朝は、日曜学校で教えるのをやめて、地元の病院で脊椎穿刺を受けるナンシーに、うろたえながら支度をさせました。私たちの心配は的中しました。小児麻痺との診断が下されたのです。私たちはナンシーをヒューストンの小児病院へ連れて行きました。私は何かと待たされるだろうと思い、モルモン経を持って行きました。どういうわけか、ナンシーは大丈夫という気がしていました。

2週間後に娘は退院しましたが、その間にモルモン経をかなり読み進むことができました。

宣教師のレッスンは再開されました。次のレッスンのときに、コーヒーを勧め



るたびにいつも断っていたわけがやっとわかりました。姉妹たちからコーヒー、お茶、アルコール、タバコを飲まないと聞かされたのです。私はがっくりしました。「さあ、ダンスはいけない、映画もショートカットもだめ、あれもだめ、これもだめと来るんでしょ。」私はそう思いながらも、これから何を言われてもそれに従う覚悟ができていました。すでにこの福音は真実だとわかっていたからです。

レッスンは終わりに近づき、救いの計画も教えてもらいました。自分がかつて神様と共に住んでいたこと、言い換えれば神様は私が生まれる前から私をご存じで、私を導いてくださったということを知りました。あのときの喜びは、とても言い表わすことができません。神様が私のことをよく知っておられるということです。考えてみてください。この私を神様が知ってくださっている。この私を！喜びが込みあげ、私は泣いていました。今までに耳にしたことの中で一番すばらしいメッセージでした。私は以前神様と共に住んでいて、神様は個人的に私を知っておいでなのです。そのときから私は神様のことを慈愛にあふれた御父、骨肉の体を持っておられる神として、素直に受け入れられるようになりました。

長老たちを紹介されたときは、どきどきしました。神権については姉妹宣教師から教わっていたので、長老たちが来られたときは、怖いような気持ちさえしました。私は神様の神権を持っておられる方々にお会いして、最も深い尊敬の気持ちを抱きました。このような経験はまったく初めてのことでした。子供たちはすぐに長老たちが大好きになりました。

毎朝、モルモン経を裏口の階段の所に持ち出して、子供たちが目を覚ますまで読みました。

私たちはバプテスマを受けました。家族でひざまずき、初めて自分から進んで、ぎこちなく、声に出して一緒に祈りました。率直に、謙遜に、これらのことは本当ですかと天父に尋ねました。そしてその答えとして、聖霊だけがくださることのできる温かく、心地よい確信を得たのです。

家族でバプテスマを受けてからの長い歳月に、たくさんうれしいことがありました。悲しいことも経験しました。夫の死はことにそうでした。でも、ホームティーチャーから慰めをいただき、家庭はいつも神権によって守られてきました。笑い、歌い、泣きもしました。落胆のどん底に沈んだことも、霊性の頂きにのぼったこともあります。神殿結婚のすばらしさを体験し、永遠の友情の意味を知り、望みがまったく断たれたように思われたときに鉄の棒の力強さを知りました。テキサスの福祉活動では、ピーナッツバター作りに参加しました。そして現在、

新しい夫、子供たちの新しい父親と住んでいるユタ州のプロボでは、ビート畑の雑草取りやえんどう豆のかんづめ作りを手伝いました。

でも、何と言っても一番感謝しているのは、末日聖徒イエス・キリスト教会の会員になれたことです。導いてくださった宣教師の方々に感謝しています。そして現在では、私たちが息子のデビッドを宣教師として送り出しています。息子が福音を喜んでくださる方々を見つけ出して、私たちが宣教師からいただいたあの喜び、幸せをお伝えできるようにと心から願っています。

\*ジェラルディン・P・ゴールディング：  
8人の子供の母。ユタ州プロボのワード部の若い女性会長



# 進め信仰もて

熱情的に ♩=92-112

1. す す め し ん こ う も て よ に つ げ よ  
 2. す す め あ い こ を も て ひ と に つ げ よ  
 3. す す め ち か ら づ よ く よ に つ げ よ

しゅ イ ス は か み の こ と あ か し せ る よ と  
 か ゴ ス く は と こ の し え い の あ な し が う  
 しゅ に よ り と わ の い の ち を う

き ぼ う と ゆ う き も て す す み ゆ け  
 む くい い は も う め ず に ほ り う し の せ よ  
 あ い と へ い わ の し ん り を の べ よ

せ か い の ひ と み な か み の こ た ち  
 しゅ に つ の か へ と さ た ち を の い だ さ ん  
 み こ と ば を つ た え て しゅ を あ が め ん

## 進め信仰もて

一、進め信仰もて 世に告げよ  
 主イエスは 神の子と証せよ  
 希望と勇気もて 進み行け  
 世界の人みな 神の子たち

二、進め愛をもて 人に告げよ  
 家族はとこしえに つながると  
 報いは求めずに 奉仕せよ  
 主に仕えて 幸を見いださん

三、進め力強く 世に告げよ  
 主により 永遠の命を得ると  
 愛と平和の 真理を宣べよ  
 み言葉を伝えて 主を崇めん





## 末日聖徒は 敬虔な民でなければ ならない

アジア地域会長会第一副会長  
ヤコブ・ディヤガー

**き**ょうここで敬虔さについてお話しさせていただきますにあたり、まずキンボール大管長の言葉を引用するのが適当かと思います。「天父と御子イエス・キリストに対する敬虔さが、日の光栄の王国に入るために、欠くべからざる特質である……。」(『敬虔な民』『聖徒の道』1977年4月号, p.213)

デビッド・O・マッケイ大管長はこれより前に、敬虔さを次のように定義しました。「敬虔さとは、敬い、尊び、重んじ、敬愛するという意味であり、信仰生活の根本となる徳である。」(ルウェリン・R・マッケイ編「幸福への道」p.258)

敬虔さという感情は、それぞれの年齢段階において多くの人々から様々な方法で植えつけられていきます。幼い子供たちは、食物の祝福のために腕を組んだり、初等協会の教師から静かな、敬虔な態度で席につくように指導される中で、早くから敬虔さを身につけていきます。そして、礼拝堂に入るときや落ち着いた厳かな音楽を聞いているときに、初等協会の子供たちはすでに敬虔な雰囲気を感じているのです。

宣教師も宣教師訓練センターに入所して与えられた召しの大切さを理解し始めると、敬虔な態度が身につけていきます。私たちは、絶えず敬虔であるように教えられた宣教師が変わっていく姿を見て、そのことに気づきました。敬虔さは生活を高める役割を果たすからです。

主はジョセフ・スミスに与えられた啓示の中で、神聖なものを軽んじないよう

に命じられました。私たちが、末日聖徒として敬虔な民でいなければならないことをしばしば思い起こす機会にあずかっているのはそのためです。

天父と御子イエス・キリストは、言葉と行ないの双方において、お互いに対する敬虔さの模範をたびたび示しておられます。たとえば天父が次のような言葉で救い主を紹介されるとき、それを強く感じることができます。「これはわたしの愛する子、わたしの心にかなう者である。」天父は、私たちが御子に対する敬虔さを示すように強く望んでおられます。私はこのことを知っています。ルカによる福音書第20章第13節にはこう書かれています。「わたしの愛子をつかわそう。これなら、たぶん敬ってくれるだろう。」同様に救い主も天父のことを語られるときは、敬虔な言葉遣いをされます。十二使徒評議員会会員のニール・A・マックスウェル長老は、この点を次のような言葉で表現しています。「イエスのように心を込めて自分の父親に仕え、絶えず敬い、完璧な信頼を寄せた息子はほかにはいない。」

ルカによる福音書第11章第2節にある主の祈りを読むと、このことがわかります。ここでイエス・キリストは御父に向かって次のように祈っておられます。「父よ、御名があがめられますように。」ルカ伝のこの節にはさらに次のような勧告があります。「祈るときには、こう言いなさい、『父よ、御名があがめられますように。』」ここでもまた、私たちは深い敬虔さを示すように教えられています。

私たちは末日聖徒として、礼拝する場所に対しても敬虔さを示すように勧告を受けています。キンボール大管長は1977年1月号の「エンサイン」の中で次のように語っています。「神殿は主の宮居である。したがって主の宮居に参入するとき、私たちは主の招待客なのである。主の宮居を神聖で、汚れなく、清潔で、快いものとするために、私たちができる限りのことを行なう必要があるのはそのためである。みずからの清さを証明しようという固い決意をもって神聖な儀式を受けるのでなければ、聖なる宮居の神聖さを汚れているのであり、文字通り聖なる場所を踏みにじっているのである。」この言葉は、教義と聖約第109章に記されたカートランド神殿の献堂の祈りとまったく一致しています。ここにその聖句を引用してみたいと思います。「この主の宮居の敷居を越えて入り来るすべての人々をして主の力を感じ、また主この宮居を聖めたまいてそが主の家、神聖なる場所なるを覚らざるを得しめたまえ。」(教義と聖約109:13)

ひとつの民としてこのような敬虔さを育て保っていくために、末日聖徒には多



くことができます。東京神殿は参入する聖徒たちに、そうした聖なる場所にある主の力を感じさせてくれます。儀式の最中にほかの人にも聞こえるような大きな声で話をするのがふさわしくないのは、このためです。

同じ理由から、人々の注意をそらすような騒がしい物音を立てることも慎まなければなりません。

これとは反対に、穏やかな音楽を演奏し、それに静かに耳を傾けることによって主の宮居の中の霊的な雰囲気が高めることができます。

神殿の中で落ち着いて手続きを済ませ、静かに儀式を受けることも敬虔さを高めるうえで大いに役立ちます。それは心に主のみたまを受けられるように、みずからを備える必要があるからです。神のみに前に聖き全き行ないをなすことを本当の意味で身につけるならば、主の教会に所属する会員として、私たちに大いなる祝福が注がれることを証します。

ブルース・R・マッコスキー長老は次のような助言を残してくださいました。

「畏敬の念は、主と主の聖なるみ名に対して抱くことはもちろん、主の律法、福音、聖約、予言者、儀式、神殿、神権、そのほか主の子らの救いと恵みのために明らかにされ、また与えられたすべての事柄に対して抱くべきである。」(「モルモンの教義」p.615)

私とディヤガー姉妹は、過去15年間にわたってアジアの3つの国々に住んだ経験があります。それによってこの地域の人々が本質的に敬虔であることを私は知っています。これは、マッコスキー長老があげたすべての点で一層の成長と発展を遂げるための強固な土台となります。愛情あふれる天父と御子イエス・キリストに対する個人的な知識、またイエス・キリストを通して人類にもたらされた福音、聖約、予言者、儀式、神殿、神権、そのほかすべての事柄は、まさに地上の神の王国である末日聖徒イエス・キリスト教会の誓約の民である聖徒たちに、最終的な完成をもたらすことでしょう。

イエス・キリストのみ名により、心からこのことを証いたします。アーメン。



●一月六日、ホワイトハウスにロナルド・レーガン大統領を表敬訪問するエズラ・タフト・ベンソン大管長

## 予言者、ワシントンに「里帰り」

ベンソン大管長、初の公務出張で、レーガン大統領、ブッシュ副大統領を訪問

「お帰りなさい。」エズラ・タフト・ベンソン大管長は、1月4日から6日までワシントンD. C. に滞在している間、合衆国大統領をはじめ多くの人々からこのようなあいさつを受けた。

それは、ベンソン大管長が1953年から61年までの間、ドワイト・D・アイゼンハワー大統領の時代に合衆国農務長官としてワシントンで活躍したことがあったからである。また1940年代初期にもワシントンに在住し、1939年から1944年まで全国農業協同組合の事務局長を務めた。ベンソン大管長は、11月に故スペンサ

ー・W・キンボール大管長の後継者となって以来初めてユタ州の外へ公務出張し、ワシントンを訪れた。これは、メリーランド州ケンジントンにあるワシントン神殿の神殿長会を任命し、また、アナンドール・バージニアステーク部からマウント・パーモン・バージニアステーク部を分割組織するためである。今回の出張にはフローラ夫人も同行した。

そしてワシントン滞在中の1月6日には、ホワイトハウスにロナルド・レーガン大統領とジョージ・ブッシュ副大統領を表敬訪問した。

## チャーチニュース

ベンソン大管長は閣僚の職についていたので、ホワイトハウス訪問は初めてではなく、さらにまた、十二使徒評議員の責任を再び果たす際、専任の政府職員を退いた後も特別来賓として再訪している。

ホワイトハウスへは貴賓専用玄関を通して案内された。「このドアを通るのは初めてですよ。」大管長は付き添いの、教会員であり元レーガン大統領特別補佐官、現在特別顧問のスティーン・M・スタダード兄弟にこう言った。

ベンソン大管長は閣僚室に案内され、そこでレーガン大統領に会見するために数分間待った。マクリン・バージニアステーク部の副ステーク部長でもあるスタダード兄弟は、そのときの様子をこう語っている。「大管長は閣僚室に入れ、とても喜んでおられたようです。閣僚時代のご経験談をいくつかされました。そしてご自分が座っておられたいすを指して、アイゼンハワー大統領の左から2番目が自分の席だったんですよと言われました。」

それから私たちは大統領執務室へ通され、ベンソン大管長はレーガン大統領に温かく迎えられました。レーガン大統領が親しみを込めて迎えてくださったことが、私にもはっきりわかりました。」

レーガン大統領はベンソン大管長にこう語りかけた。「我が家に戻ったようなお気持ちでしょう。」

ベンソン大管長はレーガン大統領に、革装の新しい「末日聖徒讃美歌」を贈呈し、その中にはタバナクル合唱団がその名を世界に知らしめることとなった多くの讃美歌が収められていると述べた。

するとレーガン大統領は大管長にこう語った。「私もタバナクル合唱団の大ファンですよ。」

約10分間のこの非公式会見中、ベンソン大管長は合衆国の最高指導者であるレーガン大統領に、11月24日の全国断食日に末日聖徒が行なった献金活動について、口頭および書面で報告した。

その報告書にはこのように書かれている。「世界中の飢餓救済のために教会員が断食献金により寄付した献金総額は、こ

の1年間で1,000万ドル以上に達している。同じく昨年初めにも、エチオピアおよび世界のほかの地域の飢餓救済のために、合衆国内の教会員は特別な断食を行ない、約660万ドルを献金した。この基金のほとんどすべてが直接の援助に充てられている。」

新たに献金された基金のかなりの金額が緊急援助に充てられ、また灌漑などの開発プロジェクトのためにも回されること、ただし基金は100パーセント困っている人々のために使われることなどをベンソン大管長は報告した。

さらに報告書にはこう記されている。「アフリカの危機の発端となった干ばつによる困窮から救済するために、財政的な援助だけでなく、この断食に伴う信仰と祈りが役立ったことは明らかである。また、この特別な断食にほかの教派の人人も参加したことは、教会員にとって祝福であった。」

最後にベンソン大管長は合衆国大統領にこのように述べた。「大統領がこの報告書に関心を寄せられ、教会が世界中の兄弟姉妹に心から進んで援助の手を差し伸べようとしていること、また私たちが正義を全うしようとする政府の指導者を支持していることを理解していただければ幸いです。」

次にベンソン大管長は大統領執務室からホールを隔てた副大統領執務室にブッシュ副大統領を訪れ、「讃美歌」を贈呈した。ブッシュ副大統領は、パラパラとページをめくりながら、こう言った。「歌ってほしいとおっしゃられても困りますよ。」

ベンソン大管長は、レーガン大統領に提出したものと同様の報告書を副大統領にも提出した。ブッシュ副大統領は感謝の言葉を述べ、モルモン教会が飢餓救済のために善意に満ちた努力をした話はずでに耳にしていること、また自分もアフリカを訪問したことを語り、ベンソン大管長にこう述べた。「私はあなたの教会の会員ではありませんが、モルモンの人々をととても尊敬しています。」そしてふたりの親しいモルモンの友人、元ミシガン州知事ジョージ・ロムニー兄弟とホテルチェーン創始者の故J・ウィラード・マリ

オット・シニア兄弟のことを語った。

ベンソン大管長はレーガン大統領とブッシュ副大統領に会見した後、アメリカ赤十字会長リチャード・F・シューバートに会うため、ホワイトハウス近くのオフィスを訪れた。シューバート氏は1985年度に教会が赤十字アフリカ飢餓救済活動を援助して215万ドルの寄付を行なったことに対し、ベンソン大管長に感謝の意を表し、このように述べた。「あなたの教会の大きな援助のお陰で、今日何千人もの人々や家族が生活しています。そしてもっと大切なことは、その人たちが将来への希望を得たことです。」

赤十字訪問の後、ベンソン大管長は長年の知己であるFBI局長ウィリアム・H・ウェブスターを訪れ、昼食を共にした。

自由にちなんだ記念碑や史跡の多いこのワシントンへの訪問により、ベンソン大管長は活力を得た様子である。ぎっしり詰まった日程にもかかわらず、86歳になる大管長はさしたる疲れも見せず、1月5日、ワシントン神殿で開かれた特別集会で約600人の会員を前に力強い説教を行ない、また2,300人余りの会員が出席したアナンデル・バージニアステーク部大会を管理した。ベンソン大管長は1940年ワシントンD.C.に最初のステーク部が組織されたとき、初代ステーク部長に召された。当時大管長は全国農業協同組合の事務局長であった。その後最初のステーク部が組織されて以来、ワシントン地区の教会員数は2,000人から約3万2,000人へと増大した。

ワシントン出張旅行を終えるにあたり、ベンソン大管長はこう語った。「私は生涯を通じて自由の貴さを教えてきました。ここへ来て、ワシントン記念塔やジェファーソン記念館を見るたびに、胸の高なる思いがするのです。」



# 南米にふたつの 神殿 献堂される

●今年1月の中旬に南アメリカでふたつの神殿が献堂された。ペルーのリマ神殿と、アルゼンチンのブエノスアイレス神殿である。以下に紹介する記事は、「チャーチニュース」からの抜粋である。

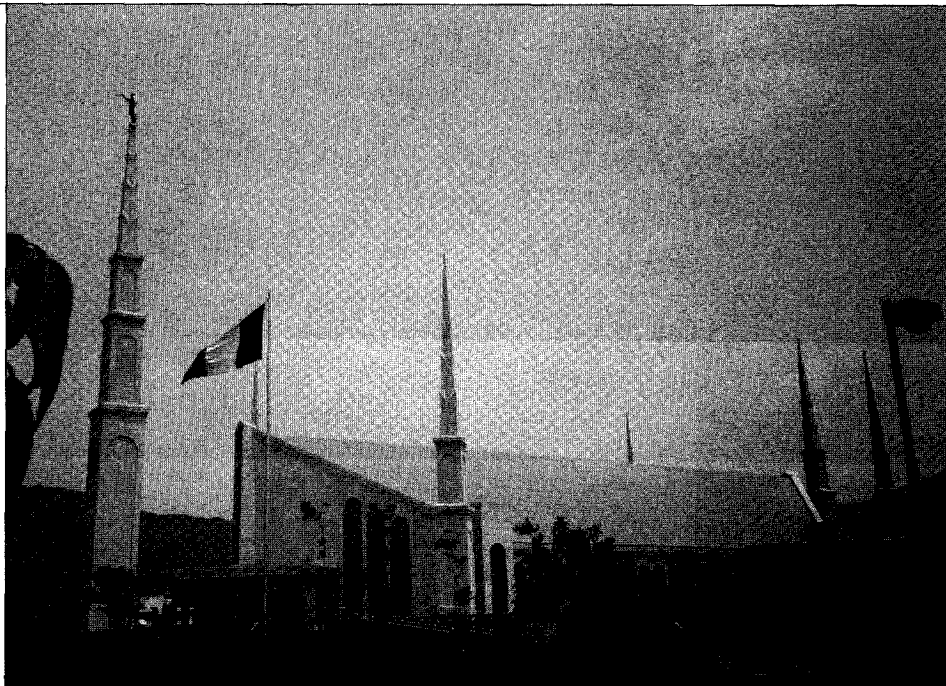
## リマ(ペルー)神殿

「幕の両側で人々の祈り続けてきた日がついに到来しました。」神殿を献堂したゴードン・B・ヒンクレー第一副管長は、こう語った。「喜びの歌があふれるのも不思議なことではありません。……神がアンデスの高地に住む誓約の民を思い起こされたからです。」

ペルーのリマ神殿の献堂式は、1月10日から12日にかけて、11回に及ぶ式典に



●1月10日から12日にかけて行なわれたリマ神殿の献堂式にはペルーとボリビアから1万777人が集った。



分けて行なわれた。参列した会員の数は1万777人に上る。快い涼風を受けて、久しぶりに青空が顔をのぞかせていた。最初に定礎式が行なわれ、次いで第1回目の式典に入った。

式典に集った会員の中には、ペルー北東地域から560キロ余りの距離を飛行機で来た人々がいる。アマゾンの熱帯雨林に囲まれたイキトスの町から来るには、この方法しかないのである。南に約650キロ離れた砂漠地帯のタクナの人々は、バスでやって来た。そのほか様々な地域から、トラックや自家用車を利用して大勢の人々が集まった。ボリビアの人々は2日ばかりでバスに揺られて来た。ボリビア国境付近で橋が決壊したにもかかわらず、1月12日(日曜日)の集会には間に合った。

献堂式に出席するために払われた聖徒たちのこうした犠牲は、教会の指導者を鼓舞してやまなかった。2日間にわたる献堂の式典の後、ヒンクレー副管長は次のように語った。「きょう皆さんの様子を拝見していますと、……力と能力にあふれた男性や、信仰のあつい美しい女性が、大勢いらっしゃることがわかります。また主がこの民の中で働いておられ、この民を贖い、生活の中に光と勤勉さをもたらし、知恵を注ぎ、神権を所有してそれを尊ぶ男性の中から指導者を育成しよう

としておられるのがわかります。」

十二使徒評議員会会員のジェームズ・E・ファウスト長老はこの神殿がペルーにとって祝福の基となることを指摘し、「神殿はどこにあってもサタン力を弱め、神の力を増大させます」と語った。

列席した教会幹部には、ゴードン・B・ヒンクレー第一副管長と十二使徒評議員会会員ジェームズ・E・ファウスト長老をはじめ、神殿管理部の実務部長を務める七十人定員会会員のロバート・L・シンプソン長老、南アメリカ北部地域教会長会に席を置き同じく七十人定員会会員のF・バートン・ハワード、ローレン・C・ダン、エリオ・ダローチャ・カマルゴの各長老がいる。また、地元神殿委員会の委員長であり地区代表でもあるマリユー・プラティ長老も出席した。

リマ神殿は11万9,000人に上るペルーの教会員と、4万5,000人のボリビアの教会員の用に供することになる。献堂式を終えた翌日には、遠方から訪問したペルーの教会員200名と、ボリビアの教会員200名が自身のエンダウメントを受けた。

なお、神殿長および介添え役は、アリゾナ州メサ出身のサミュエル・ポーレン夫妻が召された。



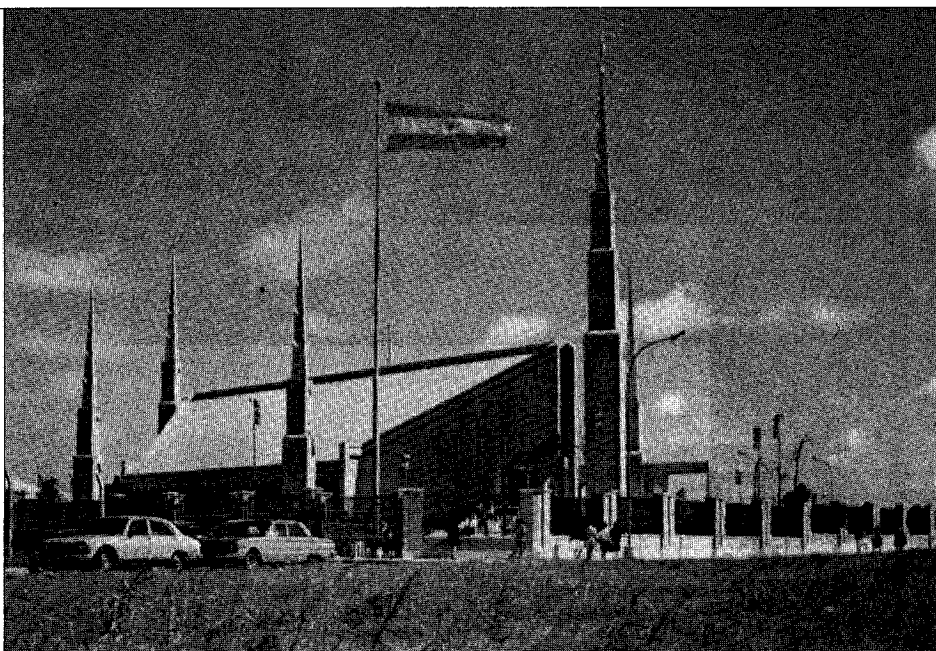
## ブエノスアイレス(アルゼンチン)神殿

南アメリカに伝道が開始されてからちょうど60周年目を迎えたその2週間後に、ブエノスアイレス神殿が献堂された。場所も発祥の地からわずか数キロ離れているだけである。

ブエノスアイレス郊外の南西地区に建てられたこの神殿は、第二副管長のトーマス・S・モンソン長老により1月17日から19日にわたる延べ11回の式典で献堂された。

1925年のクリスマスの日、当時十二使徒評議員会会員であったメルビン・J・バラード長老は、ほんの一握りの会員とブエノスアイレスの中心街にある人けの絶えた公園に集い、福音を宣べ伝える地として南アメリカを奉献した。

「1925年当時ブエノスアイレスの地に



下り立ったメルビン・J・バラード長老は、今日その同じ地がどのような状況を迎えることになるか想像もできなかったでしょう。」モンソン副管長はそう語った。

バラード長老に将来を見通す能力が与えられていたならば、この大陸に建立された4つの神殿を目の当たりにすることができたであろう。ペルーのリマ神殿、ブラジルのサンパウロ神殿、チリのサンチアゴ神殿、そしてここアルゼンチンのブエノスアイレス神殿がそれである。ブエノスアイレス神殿の建設は1980年にスペンサー・W・キンボール大管長によって発表されたが、土地の買収が難航し、着工が遅れた。

また、バラード長老が将来を先見していたなら、9,630人に及ぶ会員が献堂式に参列するさまも見る事ができたであろう。大半の出席者はアルゼンチンの人々であるが、400名前後の人々がウルグアイからバスで駆けつけ、パラグアイからの訪問者も何人か見られた。献堂式の初日は雨に見舞われたが、神殿に参集する会員の数は衰えなかった。「またとない機会ですからね。」彼らはこう答えた。

トーマス・S・モンソン第二副管長は、神殿参入を家族の活動の一部とし、先祖のための業を行なうよう、教会員に励ましを与えた。「安らぎが得られることをお約束したいと思います。世の思い煩いは

ここにはありません。」参入者は人生の永遠性に思いを馳せ、先祖を身近に感じることができる。「神殿はケースに納められた美しい人形ではありません。主は神殿が十分に活用されることを願っておられるのです。」

十二使徒評議員会会員のボイド・K・パッカー長老がスペイン語で最初に話し、神殿建設のためになされた初期の聖徒たちの献身、結び固めの権能の回復、神殿の儀式と身代わりの業の重要性について語った。

七十人定員会会員であり、神殿管理部の実務部長を務めるロバート・L・シンブソン長老は神殿におけるみ業の価値と意義について語り、現在ブエノスアイレスに駐在している南アメリカ南部地域会長会のJ・トーマス・ファイアンス、スペンサー・H・オズボーン、ウォルド・P・コール・シニアの各長老も話をした。

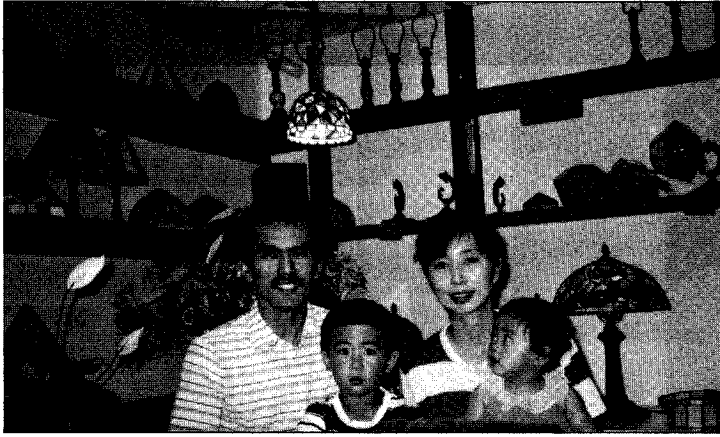
ブエノスアイレス神殿は、アルゼンチン、ウルグアイ、パラグアイの40のステーク部に所属する、16万2,500人に上る教会員の用に供することになる。

神殿長を務めるアングел・アブレア長老は、1981年に教会幹部に召される以前から、すでにこの召しを受けていた。

「私ほど長い訓練を受けた神殿長は、ほかにいないでしょう。」アブレア長老はそう語った。



●ブエノスアイレス神殿の献堂式に集う教会員と挨拶を交わすボイド・K・パッカー長老(左)とウォルド・プラット・コール・シニア長老



## ●職業と信仰シリーズ⑳

# 光に向かい……

—「患難をも喜んでいる」(ローマ5:3)—

横浜ステーク部小杉支部  
(ステンドグラスショップ経営)

岡部 和子

**窓**もない祇園の薄暗い三疊間から私たちの生活は始まりました。ひと昔前、身売りしてきた芸妓さんが、華やかなお座敷とは裏腹に、この一室で我が身を憂えていた姿が、黄ばんだ襖にまで染みついた小部屋でした。東京を先に発った主人は、一週間京都の街を探し回り、なけなしのお金でようやく借りたふたりの愛の巣でした。

私はそれまでの人生に傷つき疲れ、健康もあまり芳しくなく、両親の反対を押し切った家出同然の京都行きでした。主人の方は、絵描きの道を決意しながら、数年前から円錐角膜という原因も治療法もわからない眼病に悩まされ、思うように描くこともできないいらだちの毎日、体重も49キロと体力的にも限界の頃でした。自然と文化が融合した京都の街で、健康を快復し、絵画や芸術を学んでゆこう、と決意した二十歳そこそこの若い情熱は、不安や躊躇よりも踏み出すことを選んだのでした。

しかし、私たちをすぐさま襲ってきた問題は、生活を維持していく、という現実でした。置き屋住まいで周囲はすべて水商売の人ばかりでしたから、誘いの手はすぐに襲いかかってきました。「芸妓になってうちの店に来ない？ 舞子にならない？」お金のないときは、とすると魂までも売り渡しがちになりますが、きっぱりと断わり、昼間は洋品店にパートに出ました。そして、ためたお金で電気炉を買い、私の持っていた技術と主人のセンスで、七宝焼きのアクセサリ作り

を始めました。

伝票の書き方もろくに知らないふたりが、四条通り一流店に売りに行きましたが、その無鉄砲な行動力に主の祝福があったのか、それからは生活の足しになるいくらかの収入を得ることができました。しかし、丸一年の京都生活にも、おのずと終止符を打たなければならないときが訪れました。

主人はそれまで、スケッチブックの入ったジーンズのバッグを肩から下げ、目の痛みや頭痛をこらえながら喫茶店や寺院を巡る毎日でした。早朝欠かさず続けていたジョギングの効果で幾分体力はついたものの、目の方は一向に快方に向かわず、医者からは東京の専門医に見てもらった方がよい、との回答しか得られませんでした。

不本意な思いが残らないわけではありませんでした。私たちは再び東京に戻りました。三疊間から六疊間に昇格して借りた杉並のアパートは、私たちにはもて余すほどの広さを感じました。そしてこの上京の選択が主のみこころであったことを知ったのは、それから間もなくのことでした。

井の頭公園でスケッチブックを膝にベンチに腰掛けていた主人に、ふたりのアメリカ人の青年が片言の日本語で話しかけました。それがきっかけで宣教師たちはアパートを訪れるようになり、初めは主人ひとりで、ひと月後には私も一緒にレッスンを受けるようになりました。主人の具合が悪いときにはバナナやリンゴ

を買ってお見舞いに来ていただきましたが、後で彼らが食パンの耳を食べてそのお金を工面していたことを知ったときには、ただただ頭が下がりました。

彼らの注いでくださったイエス・キリストの純粋な愛に打たれ、私たちは彼らへの人間的な信頼を通して、神の存在を信ずるようになっていきました。また主人は、宣教師たちから勧められたモルモン経を読み通すと、「真実からは逃れられない」と改宗を決意しました。しかしバプテスマの前に私たちがぐぐらなければならない門は結婚でした。罪の意識はなく過ごしてきたふたりでしたが、私たちの一方的なお願いで、求道者のときに教会で結婚式を挙げさせていただきました。

晴れて夫婦となり、3カ月後の8月21日、私たちは皆の見守る中、バプテスマの水に沈められました。改宗してからは教会員の方々から本当に多くの愛を受け、殺風景だった部屋も、テレビ、こたつ、食器類と家庭的な彩りを添えていくようになりました。

一方角膜が円錐状に突出し、最悪のときには失明するという難病を抱えた絵描きのたどる道は、前途多難でした。円ひとつ描いてもゆがみ、人物の顔も正常な



## 各地のたより

視力の人が見ると、首をかしげるほどのゆがみ方です。それも描いた本人にはそれが容易には識別できないわけですから、自分に見える物と描くものとの差を埋めるために、1本の線、1個の円をまとも

に描くという訓練だけで、人の何十倍、何百倍もの努力と忍耐が必要でした。そうした中で、私の方は書店でアルバイトをしたり、音楽事務所に勤めたりと、なんとか家計を支えてのあるとき、結婚から4年、待ちに待っていたとも、恐れていたとも言える霊の子の訪れがありました。「何を捨てても絵描きの道は貫き通す。絵画を通して、人々と青空のような喜びを分かち合いたい」と口癖のように言っていた主人も、その頃から徐々に心境の変化が起こり始めました。「自分の家族すら幸せにできぬ者が、どうして人々を感動させる画家になれるだろうか」と。福音の大きな力によって人間的な深みを加え、また新たな出発を始めることになりました。

ある日、吉祥寺の近鉄デパートでステンドグラスの実演を目にした主人は毎日のように通い続け、それから台所のテーブルで見よう見まねの試作が始まりました。教室に通いたくても肉体的にも金銭的にも余裕がありませんでしたから、本を読みながら、まったく独学でマスターしていきました。そして半年後には近鉄デパートの一坪ショップを機に、ステンドグラスを仕事へと発展させていきました。

長男健太郎が1歳近くになったときには、私もそれまで続けていた小説の仕事を辞め、夫婦そろって同じ道に入りました。しかし、ステンドグラスの世界も、その美しさとは裏腹に平坦な道程ではありませんでした。中世ヨーロッパの寺院を忍ばせる窓のパネルも、近代開発された色彩鮮やかなティファニー式ランプも、光の芸術を楽しんでいるゆとりはなく、常に仕事、仕事の厳しい目が先行します。主人の視力では車の免許も取れませんが、大風呂敷に商品を包み、電車で営業に回り、私は私で赤ん坊を背負ってランプを作り、納品や集金に行く、と言ったステンドグラスの優雅なイメージとはか

け離れた現実でした。

今、長男の年と同じ5年の歳月が流れ、ふたり目のいずみも生まれ、家庭生活のうえでも、仕事のうえでも、主の祝福を数えあげながら歩んでこられたことを感謝しています。

自宅のダイニングで仕事をしていたのが、知人の紹介で5万円という家賃で日吉の駅前ビルの3階が借りられ、教室が開けたのも主の導きでした。ところがその数カ月後に、ぜひ30万でとの借り手が現われました。「好意で貸したのだから、即出てほしい」と言われ、一時は途方に暮れましたが、けんか腰の家主に最後まで福音の精神で接し、相手の要望に気持ちよく応えようと努力したときに、主はそれを上回る祝福をくださいました。

大通りに面した場所で倉庫になっていた家を見つけ、両親の援助をいただいて改装し、私たちの念願であった店と工房をこんなにも早く持つことができたのです。また、私も仕事には欠かせないと覚悟を決めて免許を取りましたが、すぐに友人が安く中古車を譲ってください、今は仕入れ、納品、子供たちの保育園への送り迎えと、毎日重宝しています。

以前は夢だったパネルの仕事も取れる

ようになり、仕事の幅も広がってきましたが、目の障害と闘いながら仕事に取り組む主人と兼業主婦の私たち夫婦には、依然として毎日が奮闘の連続です。不注意や無知のために多くのトラブルを起しますが、一心に祈りながら、ときには夜中の12時、1時まで家族が力を合わせて励むときに、必ず助けがあり、どんな難関をも乗り越えてこられたことを深く感謝しています。「それだけではなく、患難をも喜んで。なぜなら、患難は忍耐を生み出し、忍耐は錬達を生み出し、錬達は希望を生み出すことを、知っているからである。そして希望は失望に終わることはない。なぜなら、わたしたちに賜わっている聖霊によって、神の愛がわたしたちの心に注がれているからである。」

(ローマ5：3-5)

私を支えてくれた主人に、子供たちに、両親に、そしていつも温かい励ましと助けを与え続けてくださる兄弟姉妹の皆様に、心からの感謝を申しあげます。主が生きておられ、ジョセフ・ミスが回復したこの教会の教えが、私たちを救い得る真実まことの福音であることを心から証いたします。(おかべ・かずこ 1948年生まれ、小杉支部扶助協会教師)

## 子供の病から学ぶ

—「み恵み数えあげ、  
主のわざ数え見よ」—

東京北ステキ部  
中野ワード部

川根 幸子



「お子さんは髄膜炎です」と大学病院の医師から告げられたとき、その病気について、前に本で読んだことがあるような気がしました。詳しくは思い出せませんでした、ただ「死亡の可

能性がある」と書いてあったことだけが、一瞬脳裏をかすめました。それが記憶違いであれば……という願いも医師から聞いた病気の説明で無残にも断たれ、さらに大きな不安が次から次へとわき起こっ

## 各地のたより

てきました。

入院した晩、息子の直<sup>ただし</sup>(1年10カ月)は熟睡できないらしく、ときどき苦しうに泣いています。体が棒のように固くなっているのですが、点滴のためにベッドに縛られた片方の腕をもう片方の手で取り払おうとしたり、首を触ったりしていました。両足が麻痺<sup>まひ</sup>していて、相当強くつねらなると反応しません。おしめを取り換えるときにだらんとした足が細く見え、痛々しく感じられました。

私は、直が苦しんでいるのを見て、必ず完治するという信仰を持つことはできませんでした。バプテスマを受けてから11年、今まで自分の信仰を疑ったことはありませんでしたし、キリストが多くの人の病を癒されたことを素直に信じていました。しかし、この試練を前にしては、私の信仰は本当にはかない、情けないものだったのです。まるでペテロがキリストを3度知らないと言って自分の信仰の弱さを悟り、激しく泣いたときのような衝撃がありました。

主人と私は、まさにわらをもつかむような気持ちでステーク部長に直のことを話しました。彼は、「もしも」ということは考えないで、直が完全に健康な体に戻れると信じるよう、悲観的になっていた私たちを励ましてくださり、また妊娠中だった私に特別な祝福を施してくださいました。

次の日から私たちの思いは完全に変わりました。「直は完全に治る。また元どおり元気に遊べるようになる」と。ステーク部中の兄弟姉妹、そして古い友人たちの祈りが本当に大きな支えとなりました。私は絶えず祈りの力を感じ、心が平安と幸福な思いで満たされるようになったのです。自分でも信じられないくらい元気に看病することができました。かすかな信仰は、揺るぎない確信へと変わっていったのです。

神様は私たちの祈りに応えられ、神権の力と祈りにより直の病気は完全に癒されました。病院のベッドの中で、足が徐々に動くようになり、寝返り、つかまり立ち、伝い歩き、そしてついにひとりで歩いたときには、満1歳の頃に初めて歩

いたとき以上の大きな喜びがありました。主人と私は、これまでの思いや行ないを悔い改め、これからの人生を主と教会の人々のために捧げたいと思いました。

レーマンやレミュエルが、天使に会い、奇跡を見、神様から数多くの祝福を受けた後にも恵みを忘れ罪を犯してしまったことは、本当に残念なことです。時が経つと人の信仰や証は輝きを失い、色あせてしまうことがあります。それはあたかもすばらしい宝を持ちながら、大切なあまりに家の奥へとしまい込んで、だれにも披露することなく一生を終えてしまう人のようです。試練に打ち勝って成長し、

証を強めたとしても、その経験をその後の生活に生かさなければ、何のために試練を受けたのかわかりません。

私にとって、この証は人生の宝物です。レーマンやレミュエルのように、その価値を忘れて捨ててしまわないようにしたいと思います。讃美歌に「み恵み数えあげ、主のわざ数え見よ」(『この世のあらしに』「讃美歌」46番)とありますが、私は常にこの感謝を忘れずに歩いていきたいと思っています。主が生きておられることを心から証いたします。(かわね・さちこ 1956年生まれ、中野ワード部扶助協会家庭訪問管理会員)

## 家族、親族 14人の改宗

—福音を分かち合う喜び—

沖縄那覇ステーク部  
沖縄支部  
内間 満

●「私たちは皆、末日聖徒の信仰を受け入れました。」後列左端が内間満兄弟



「なぜこんなに他人へ関心を示すのだろうか。」私はそれだけで宣教師に興味を持ちました。レッスンは早いペースで進み、私はすべてを受け入れることができました。「知恵の言葉」を克服し、1984年9月16日、それまでの罪を赦され、真の教会の会員になりました。

教会に集い、兄弟姉妹の証を聞くとき、模範を見るときに、段々と私の教会に対する証も強くなっていきました。その証をもって生活するときに、多くの祝福と恵みを受けるようになりました。一日一日が楽しくて、私は人生の目的を知っている者として、幸せを感じていました。リーハイがすぐに妻子とその喜びと幸せを分かち合いたいと思ったように(Iニ一ファイ8:12参照)、私も家族と分かち

合いたいと思いました。そして、家族に福音を伝えようと決心しました。

何度も宣教師と会い、どのように福音を伝えるかを話し合いました。そのような時間を持つことによって、私は宣教師との仲を深め、信頼と愛、希望を感じるようになっていきました。そして、家族伝道を開始したのです。

家族にいきなりレッスンを聞くように勧めても逆効果になると思い、まず家族に宣教師を会わせ、友達になってもらおうと考えました。宣教師の模範はすばらしく、家族全員が彼らに興味を示し始めました。

何度も宣教師を招待して、食事会を開きました。母は、「遠い国から来ている人においしいものを」と食事を作り、英語

## 各地のたより

が少し話せる父は、宣教師と英語で話をしました。祖母は、宣教師の行ないに感心し、ふたりの弟と妹は、外人が家に來ている珍しさも手伝って、楽しそうでした。そうして次第に家庭の中は、宣教師のレッスンを受けてもよい雰囲気となっていました。

まず妹がレッスンを聞くようになり、私のバプテスマから4カ月後の1985年1月にバプテスマを受けました。私は妹にバプテスマを施すことができ、ひとりの人を天父に導くことの喜びを心で感じました。そして、その月の末には祖母がバプテスマを受けましたが、そのときは祖母だけではなく、祖母の妹さんとその娘さんのふたりもバプテスマを受けました。私は、73歳の祖母から、「今まで自分の考えで生きてきた人生を、これからは、天父の教えに従って生活していく」という証を聞いたとき、とても感激しました。

その次に、私のいとこの子供たち3人が2月に、また弟のひとりがその月の後半にバプテスマを受けました。3月には、親戚の子供が受け、4月には、父と母がそろってバプテスマを受けました。このとき私は、心からこの父と母の下で生まれ、育てられたことに感謝しました。そして、家族で最後に残っていたもうひとりの弟が4月後半にバプテスマを受けました。7月には、祖母の姉も受けました。

私の家族伝道は、家族、親戚、14人が改宗するという結果になりました。もちろん、これからは親戚への伝道を続けていきます。天父の祝福と愛に感謝します。また、いつも私たち家族のために祈り、導いてくれた宣教師に感謝します。これからも、全員が耐え忍んでいけるように、家族と福音の中で生活していきたいと思っています。

今春、私は専任宣教師として、伝道に

出る準備をしています。私は家族伝道を通して、福音を分かち合う喜びを十分に感じてきました。召される伝道地でも、一生懸命伝道したいと思っています。私の一番好きな聖句は、パウロが述べている、「神の国は言葉ではなく、力である」(Iコリント4:20)と、「福音のために、わたしはどんな事でもする。わたしも共に福音にあずかるためである」(Iコ

リント9:23)のふたつの聖句です。このふたつの聖句をいつも心に思い、行動していきたいと思います。

私は、末日聖徒イエス・キリスト教会が真の教会で、ベンソン大管長が天父より召された予言者として、私たちを導いておられることを証いたします。(うちま・みつる 1964年生まれ、沖縄支部若い男性第一副会長)



## 夢によって導かれた主の召し

東京北ステーク部第一副ステーク部員  
川越ワード部所属

大石 知香男

今から2年ほど前、日本中のメンバーシップカードの整理やパウンドリーの見直し、統合化がなされ、私の所属しておりましたステーク部でもそれに伴って新たに指導者を召す必要がありました。そしてそのために、特別ステーク部大会が1984年4月26日に開かれることになっておりました。

特別ステーク部大会の前日の午後、七十人第一定員会会員のウィリアム・R・ブラッドフォード長老から面接があり、「主は杉澤廣行兄弟をこの東京北ステーク部のステーク部員として召されました。そして大石兄弟、あなたを第一副ステーク部員として召されました。おめでとう」と言われました。

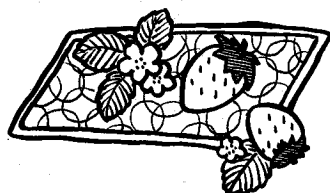
私はこの召しを受けるにあたって3週間前にひとつの夢を見ました。夢の中でステーク部大会が開かれており、大会の管理者であるブラッドフォード長老の隣に、新しくステーク部員として召された杉澤兄弟が座っておられました。その大会に出席しておりました私の心の中に、

「大石兄弟、杉澤ステーク部員を助けなさい」という主の声が聞こえました。

夢から覚めた私はなんと大それた夢を見たんだろうと思いました。なぜならば、これまでステーク部員会で働いてこれた多くの兄弟たちを目にしましたが、だれもがすばらしく、自分自身と比べてみて月とスッポンの違いがあり、そのようなことは万にひとつもあるはずがないと、その夢をすぐに打ち消しました。

しかしながら、折に触れ、その夢が脳裏をかすめ、その思いから逃れることができませんでした。とにかく、生活を整え、できるかぎり靈性を高めようと思い、努力をしておりました。

2月20日の夜、「ブラッドフォード長老が面接したいとおっしゃっておりますので来てください」という電話があり、日時と場所の指示がございました。教会に入って12年近くになりますが、これまでに教会幹部からの面接を受けたことは一度もございませんでしたので、本当にびっくりしてしまいました。指定された日



## 各地のたより

時には仕事が予定されていましたが、とにかく、「はい」と答えるのが精いっぱいでした。ますますって霊的な準備をする必要を感じ、そのように努力し、一日一日を生活いたしました。

2月24日の金曜日から断食をし、土曜日の朝4時頃起き、自分の罪や汚れをイエス・キリスト様の贖いの力で清めてくださるように、弱さや欠点を赦してくださるようお願い、祈り求めました。さらに、どのような召しでも喜んで従順に受け入れることができるように、謙遜さと信仰を持つことができるように切に祈り求めました。

そして大会の当日には夢で見たと同じように、ステーキ部の再組織がなされたのです。今にして思えば、もしあの夢がなかったならば、私にとってあまりにも大きすぎるこの召しを受け入れることはむずかしかったのではないかと思います。夢を通して3週間の間、心の準備や霊的な備えをさせていただけたことを主に深く感謝しています。主は私たち一人一人の思いや状態をよくご存じです。

あれから2年の歳月が流れましたが、この間に、主のあふれんばかりの愛と助け、導きを得ました。口では言えないほどたくさんのすばらしい体験をさせていただきました。この責任を通して主から召された多くの立派な指導者や兄弟姉妹と交わることができ、信仰が鼓舞され、証が強められたことを心より感謝しております。妻と子供たちが家族の祈りの中で、「杉澤ステーキ部長やお父さん、斎藤副ステーキ部長がよくその責任を果たせますように……」と祈ってくれるのを聞くたびに、心に特別な気持ちと励ましを受けてきました。家族の理解と助けに感謝しています。

欠点だらけで力の弱い私のような者が、なぜこのような大きな責任に召されているのだろうかと思うたびに、あのときの夢が思い出され、励ましと勇気が与えられます。

私たちが携わっておりますこの業はイエス・キリスト様を頭とする主のみ業です。神様が確かに生きてましまし、主から召しを受けたとき、道や方法がわから

なくても、主は命じたもうことに、必要な道や方法を備えてくださっている（I ニーファイ3：7参照）ことを心より証します。（おおいし・ちかお 1950年生まれ）

### すべてを神様に ゆだねて



岡山伝道部専任宣教師  
宮地 美佐子

**15**歳の終わり頃、ふとしたことから聞いた「モルモンはコーヒーやお茶などを飲まない」ということにとっても興味を持ち、電話帳で教会の電話番号を調べ、教会へ行くようになりました。それから約1カ月後の1976年6月4日にバプテスマを受けました。バプテスマを受けたことがとてもうれしく、ぜひこの喜びをだれかに伝えたいと思い、すぐに1番仲の良い友だちに電話をかけ、2日後の日曜日には彼女を教会に連れて行きました。思えばその日から私の伝道は始まったのです。

喜びを人に伝えることのできる「伝道」という言葉が、何よりも大好きでした。マッケイ大管長の「すべての教会員は宣教師である」という言葉をいつも心に留め、機会あるごとに伝道してきました。

16歳の頃から、伝道に出ることは私にとって大きな将来の目標になりました。私にも将来の夢はたくさんありましたが、まず神様のために働いてから自分のことをしようと決めました。そして伝道に出るのなら、キンボール大管長が言われたようによく準備をした宣教師になろうと思いました。

高校生の頃は、オルガンを弾くことも伝道の準備になると聞いて、学校の帰りに教会に寄って一生懸命練習しました。1曲弾くのに1年近くかかりました。また、伝道資金をためるために、19歳のとき、卸売市場の魚屋さんの事務のアルバイトを一年半ほどしました。毎朝5時頃起きてまだ人影もまばらな電車に乗って出かけ、学校が始まるまでの時間働きました。慣れない仕事に失敗して、泣いて帰ってきたこともありました。また、特に冬の朝はつらく、それでも伝道のためだと歯を食いしばって続けました。ステーキ部宣教師としても一生懸命伝道しました。

やっと待ちに待った21歳になり、伝道に出られると思った私ですが、それは無理なものとなってしまいました。祖父は寝たきりで、家族が団結して助け合わねばならないときに、母までが看病疲れと精神的な疲労から入院してしまいました。また弟は大学受験で苦しんでいました。私はそんな状況の中で、神様はなぜこんなに試練を与えられるのだろうと泣きました。それ以後もいろいろなことがあり、伝道のことはもうあきらめていました。

しかし、私には伝道を忘れることができずしてました。24歳になり、もう1度出ようと心に決めるとき、神様は早朝セミナーの教師として働くように私を召されました。

早朝セミナーは名古屋ステーキ部では初めての試みで、月曜日から金曜日までの週5日、毎朝6時からのレッスンです。生徒にとっても教師にとっても大きなチャレンジとなりました。

日本でも早朝セミナーが始まると思うとうれしくて、ぜひやってみようと思いました。でも、もし引き受けたら伝道は？ セミナーが終わってから出ると

## 各地のたより

したら私は一体何歳になってしまうのでしょうか。今でさえ年齢的にギリギリだと思っているのにさらに8カ月……。

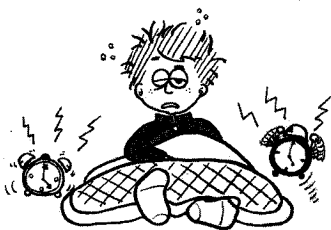
1度は引き受けたものの、レッスンの始まる4月までの3カ月間、伝道のごことで毎日のように悩みました。なぜ今伝道に出られないのだろう。神様は私を宣教師として必要とされていないのかも知れない……。何日も断食して祈りました。最終的に自分の思いではなく神様のみこころを行なおうと思いました。そして4月1日から名東南ワード部と名東北ワード部合同の早朝セミナーが始まりました。生徒は初めの5人から7人に増え、みんなが皆勤賞を目指して雨の日も台風の日もテストの日も本当によく頑張つてクラスに出席しました。

私も生徒に少しでも良いレッスンができるように一生懸命準備し、ときには4時間から6時間もの時間を費やすことさえありました。それでもうまく教えられずに、がっかりして帰ることもしばしばで、明日こそはと決意を新たにす毎日でした。

生徒はただ知識を学ぶだけでなく、本当によく実践してくれました。家でも学校でも模範を示し、皆がそれぞれの光を輝かせました。いつも神様の助けを感じていました。

4月1日から11月15日までの7カ月半、生徒たちはよく頑張りました。そして全員1日も休まずに出席し、皆勤賞を取ることができたのです。また、指導者やご両親を招待した最後の日に、改宗して1年に満たない生徒のお母様も朝6時に教会に来てくださって、泣いて感謝をされ、出席された人々の胸を打ちました。生徒たちも教師である私も、イエス・キリスト様に対する強い証を持つことができました。

セミナーが終わって3日後の11月18日、すばらしい思い出を胸に伝道に出ま



した。私が伝道に出ることを許してくれた両親に心から感謝しています。セミナーを始めて2週間目にお見合いの話が出たとき、伝道に出るまでは結婚するつもりはないという気持ちを伝えると、そこまで決意が固いのなら仕方がないと許してくれました。親類や近所の人に自分たちが笑われるのを承知で娘のわがままを許してくれたのです。

私はイエス様を心から愛しています。



●7人全員が早朝セミナーで皆勤証を得た。前列右端は教師の宮地美佐子姉妹

**私**たち家族には3人の子供が与えられています。長男は大学在学中でセミナーの年代ではありませんが、次男は高校2年生、長女は中学3年生ですので、このふたりがセミナーのお世話になりました。

最初ワード部で早朝セミナーの話を知ったときには、とても朝早く、そのうえそれが毎日というので、続けることができないのではと心配が先に立ちました。

教師が召され、早朝セミナーの授業が始まると、私たちの子供も眠い目をこすって出席しました。いつになったら悲鳴をあげるか興味津々でした。教師に召された宮地美佐子姉妹は子供たちにある約束をしたそうです。それは、雨が降った場合は教師も教会まで自転車で行くというものでした。なぜ自動車を使わないでわざわざ雨の日には自転車を使うのだろうとの疑問に、宮地姉妹はこう答えてくれました。「子供たちと一緒にその苦勞を

すべてを捧げてイエス様に従っていくつもりです。すべてを神様にゆだねて……。神様が愛する家族を守ってくださると心から信じています。「おおよそ、わたしの名のために、家、兄弟、姉妹、父、母、子、もしくは畑を捨てた者は、その幾倍もを受け、また永遠の生命を受けつぐであろう。」(マタイ19:29) (みやち・みさこ 1960年生まれ、名古屋ステーク部名東北ワード部出身)

## 子供が早朝セミナーに出席して

「青年の時智恵を得よ」  
(アルマ37:35)

名古屋ステーク部  
名東北ワード部  
山口 貴幸

分かち合いたいのです。」

来る日も来る日も、子供たちは早朝5時頃に起きて教会に通い続けました。私たち夫婦が朝まったく気づかないうちに、自分たちだけで起きて、出かけて行きました。夏休みに入ると、朝教会に行ったまま昼になっても帰って来ません。レッスンが終わってから、セミナーのメンバーだけでバドミントンやピンポンをして教会の中で楽しく過ごしていました。教会が楽しくて仕方がないという様子でした。学校に行くよりも教会の方が好きになったようです。とうとう最後まで、だれひとりとして休むことなく全員が出席し続け、全員が皆勤証をいただきました。

この間宮地姉妹は、毎日レッスンの準備で忙しい中、子供たちの誕生日には手作りケーキをプレゼントしてくれたり、若い男性、若い女性のカンファレンスのときには一人一人に手紙をくれたりと、大愛力を注いでくださいました。そのお

# 各地のたより

陰で子供たちも一丸となってこのプログラムに積極的に参加することができました。

聖典には「青年の時智恵を得よ」（アルマ37：35）とありますが、早朝セミナーは福音になかったすばらしいプログラムだと証することができます。また、「まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものは、すべて添えて与えられるであろう」（マタイ6：33）とあるとおり、神様に属ける事柄を熱心に行なうとき、必要なものは与えられるということがよく理解できました。

早朝セミナーのプログラムが終了し

た今も、教師との約束を守り、毎朝早く起きて聖典を読むことを習慣づけています。宮地姉妹はプログラムの終了3日後に伝道に出られ、神様のメッセージを携えて専任宣教師として働いていらっしゃいます。本当にすばらしい教師に恵まれましたことを感謝しています。

私は、努力するときすばらしい祝福が得られること、そしてセミナーのプログラムを通して霊の糧を豊かにいただくことができることを、心から証いたします。（やまぐち・たかゆき 1939年生まれ、名東北ワード部第一副監督）

しかし、バプテスマを受けることはできたものの、絶対に伝道に出ないということを決意しなければなりません。そのときは自分が伝道に出るなど夢にも思っていませんでしたので、軽い気持ちで「伝道なんか出ないから心配しなくていいよ」と言っていました。父との関係は教会員になったあとも少しも良くなりませんでした。父は口を開けば「教会にばかり行って」と文句ばかりでした。

やがて時が経つにつれ、ユースミッションナリーのプログラムに参加する機会もあり、伝道についてよく考えるようになりました。そしてついには伝道に出たいと思うようになりました。家の中では「伝道」を口にすることも許されず、いつも「伝道に出たら、親子の関係はなくなると思え」と言う父でした。これまでいろいろな人から、あるいは「聖徒の道」などで、奇跡的に両親の心が和らぎ、伝道に出ることのできた宣教師の証を聞いたり読んだりしていましたが、自分の父だけは決して許してくれないだろうと強く心に思っていました。それでもその一方で伝道に出たい気持ちは強くなっていきました。

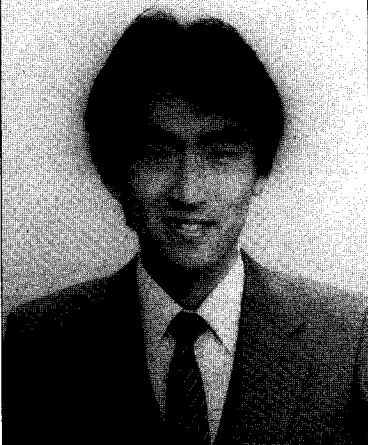
私はちょうどその頃から、BYU（プリガム・ヤング大学）に行きたくて勉強したいと思っていました。そしてよくお祈りしているうちに、伝道に出るとしたらBYUから出る以外に方法はない、と思うようになりました。幸運にもBYUに受け入れられ、日本の大学を卒業して、6月から大学院へ行くことが決まりました。BYUへ行ったら必ず毎週両親に手紙を書いて、神様や教会について証をしようと決心しました。そして伝道に出たいという気持ちを告げようと思いました。ある長老から、ひとつのすばらしい聖句を教えてもらいました。それは教義と聖約の第31章で、主は伝道に出る人の家族を必ず祝福して下さる、というものでした。これはいつも私の心の励みになりました。

心に決めたとおりに、毎週両親に手紙を書き、私の証を伝えました。ある日、先の聖句を教えてくれたカーソン長老からの手紙で、私の家族の教会に対する態度

## 家族と伝道

—「毎週両親に手紙を書き、私の証を伝えました」—

福岡伝道部専任宣教師  
入江 伸光



**私**は高校時代、自分の家族がきらいでした。父と母はいつもけんかをするし、弟と私はたびたび殴り合いのけんかをしました。学校から帰って来ても、食事のとき以外はだれとも顔を合わせることもなく、自分の部屋に閉じこもり、音楽を聴いてはいやなことを忘れようとする毎日でした。

そんな私もいつしか宣教師に出会い、バプテスマを受けたいと思うようになりました。頑固で厳しい父のことですから、反対されるのはわかっていたのですが、やはり想像以上にひどい結果となりました。

ある日、父が宣教師たちを家に呼ぶように言うので、彼ら呼んで話をしました。しかし、その途中で父は非常に怒り出し、庖丁を取り出してきて、「伸光、おまえがもし教会に入るなら、私は先祖に対して申し訳が立たない。必ずこの包丁で自分の腹を切るからな。よく覚えておけ」と言うのです。そのとき、これでは

バプテスマを受けるのはとても無理だ、とあきらめそうになりました。しかし、ハリー長老とクーパー長老は私に、「どうかあきらめないでください。今は無理かもしれませんが、でも、いつの日か必ずバプテスマを受けられる日が来ます」と言ってくださいました。

彼らが帰ったあと、両親の部屋へ行き、手をついて「バプテスマを受けさせてください」ともう一度頼みました。そして生まれて初めて言葉に出して「お父さんとお母さんのことを愛しています」と言って、その場に泣きくずれてしまいました。そんな私の姿を見て、母は父に「ねえお父さん、この子がこんなにまで頼むなんてよっぽどのことに違いありませんよ。もう許してあげましょうよ」と泣きながら頼んでくれました。それから1カ月後、バプテスマを受けることができたのです。私にとって、奇跡以外の何ものでもありませんでした。



## 各地のたより

が変わり、良くなってきたことを知りました。それで伝道に出たいという自分の気持ちをカセットテープに吹き込み、送ることにしました。いつもはすぐに返事が来るのにそのときだけは3週間経っても返事がなく、何か起こっているに違いないと思いました。

やがて監督の奥さんからの手紙を受け、両親が私からの電話を望んでいることを知りました。とても怖かったのですが、電話をかけたところ、母はかなり前から私が伝道に出るだろうと思っていたらしく、何も言わないから自分のしたいようにしなさいと言ってくれました。しかし父は、「大学へ行くと言うからアメリカへ行くのを許したのに、伝道に出るとはどのようなことなのか」と怒りました。横から母が半分泣きながら、「そんなこと言わないで、もうそれでいいじゃない」と言うのが聞こえました。すると父は「おれが何を言っても伝道に出るんだらう。もう勝手にすればいい」と言いました。父

はたとえ心の中で許してくれていても決して素直に言葉で言える人ではありません。あれで精いっぱい許してくれていたのです。私はうれしくて仕方ありませんでした。

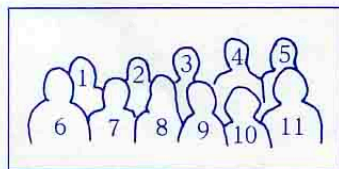
一番心配していた両親からの許可ももらえて、もう何も問題などないように思っていました。ところが思わぬところをつまずいてしまいました。ホームワード部からの資金援助が危うくなったのです。それでは伝道に出られません。ショックでしばらく勉強も何も手につきませんでした。ある日、母にそのことで悩んでいると手紙に書いたのです。後で聞いたのですが、その手紙を読んだ母は監督に電話をかけ、私が伝道に出られるように頼んでくれていたのです。そのお陰で、資金の問題もなんとか解決し、ついに伝道の召しを受けることができました。

アメリカの宣教師訓練センター(MT C)に入る前に家に帰って来てよいと両親から言われましたが、あの電話以来

父とは話していませんでしたので、正直言って会うのはとても怖かったです。しかし、家に入って「ただいま」と言うと、父はニコリ笑って「お帰り」と応えてくれました。そして小遣いがあるだろうと、たくさんのお金をくれたのです。信じられませんでした。今、両親が変わってきたのがよくわかります。BYUに行くまで、家族そろって伝道の話ができるなんて想像もつきませんでした。

母は毎日、伝道に必要な物を買に行ったり作ったりしてくれています。父は、私が自分の故郷の九州へ行くということとても喜んでくれています。そして弟も、「兄ちゃん、もう宣教師になる覚悟はできているのか?」と声をかけてくれます。カーソン長老が私に言ってくれました。「伸光がいつも何か大切な手紙を送ったとき、また伝道に行きたいことを吹き込んだテープを送ったとき、それらが伸光の両親の所へ届く日に限って、僕たちは偶然伸光の家に立ち寄ったんだよ。そ

### ①月に召された JMTC 第80期生 11名の名簿



S: ステーキ部, W: ワード部  
B: 支部, M: 伝道部



〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉	〈名前〉	〈出身地〉	〈伝道地〉
1. 武村 政代	札幌M/釧路B	福岡伝道部	7. 浜野 久美	福岡S/佐賀B	東京北伝道部
2. 中川 三枝子	横浜S/上大岡W	神戸伝道部	8. 福田 めぐみ	東京北S/豊島W	名古屋伝道部
3. 岩崎 武浩	札幌西S/琴似W	東京南伝道部	9. 中江 はるみ	札幌西S/新琴似W	名古屋伝道部
4. 畔津 宏治	東京東S/小岩W	大阪伝道部	10. 村田 敦子	東京東S/日立B	大阪伝道部
5. 堤 正彦	東京北S/豊島W	仙台伝道部	11. 山瀬 千佳子	東京西S/府中W	名古屋伝道部
6. 高塚 知恵	町田S/厚木B	神戸伝道部			

## 各地のたより

して、一緒に教会や伝道について話すことができたんだ」と。

私は確かに神様がカーソン長老たちを家族の所へ導いてくださったのを知っています。また、確かに彼らの心を和らげ、私が伝道に出られるように祝福してくださったのを知っています。また神様だけでなく、霊界で待っている私の先祖たちも助けてくれているように感じます。私の父の故郷、まだ会ったこともない親戚のたくさんいる地、九州の福岡伝道部に召されたのも不思議な気がします。きつと反対されていた頃には考えられなかつ

たような多くの祝福が待っていることでしょう。

私は今、家族に何と感謝していいのかわかりません。家族の大切さをこの経験を通して本当によくわかりました。彼らのことを心から愛しています。

この教会は真実であることを証いたします。神様が生きておられ、私たちを愛してくださっていること、また私たちが伝道に出ようとするとき必ず助けてくださることを証いたします。(いりえ・のぶあき 1962年生まれ、大阪ステーキ部東大阪ワード部出身)

挙行されました。

その日、会場に参列してくださった方々の中には、これまで国立ワード部を率いて来られた歴代の支部長、監督、さらにこのワード部にゆかりのある懐しい兄弟姉妹など、たくさんの人たちの顔が見られました。

宮脇ステーキ部長の厳かな献堂の祈りが会場に響きわたり、聖なる建物として確かに主に奉献されたことを、みたまを通して知ることができました。

この献堂された教会堂は、東京都心から西へ下った所にある商業都市、立川市内にあり、最寄りの国鉄南武線の西国立駅より歩いて5分と、とても交通の便の良い場所にあります。また、教会堂の近くには公共施設である立川市民会館や大きな病院が隣接し、緑にも恵まれた静かな所です。

私たちがこのような立派な教会堂を頂くことができたのも、長い間にわたって多くの指導者や会員一人一人のたゆまぬ奉仕、建築基金へのチャレンジに応えた犠牲の精神、加えて断食を伴った真心からの祈りがあって、主が私たちに祝福として与えてくださったものと心より感謝しております。

国立ワード部は家庭的な雰囲気のとて落ち着いた感じのワード部です。毎年4、5名の若人が専任宣教師として召されており、独身成人の証と一致は力強い限りです。また、系図活動も保坂三郎大祭司グループリーダーの地道なリードのもとに活発に行われており、多くのすばらしい兄弟姉妹がおられ、その模範は我々の霊を鼓舞してくれます。

私たちは今年1年間のワード部の目標として「日々心を新たにすることによってみずからを造り変え、喜んで福音を実践できるようになる」(ローマ12:2)を掲げました。会員一人一人が常に、新しい自分自身を熱心に探し求め、完成への道を歩んでほしいと願っています。

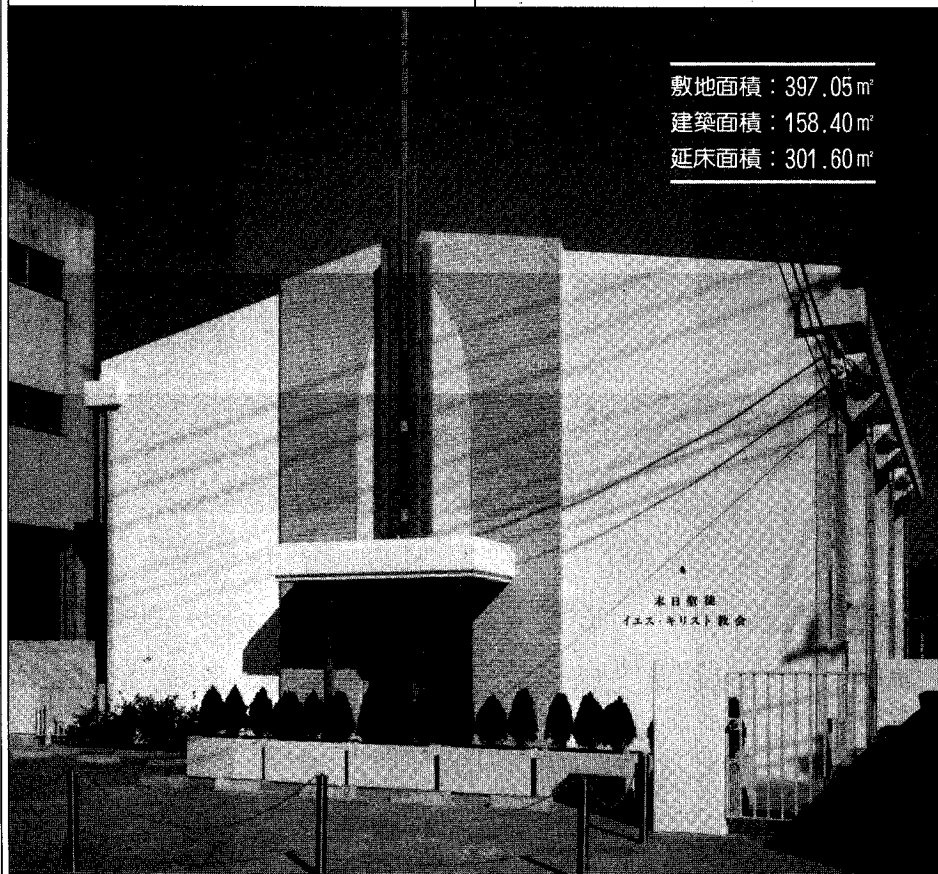
願わくは、この聖められた教会堂に入って来られるすべての人々のうえた主のみたまが宿り、福音の甘い実を心ゆくまで味わっていただくことができますように……。 (国立ワード部監督・栗原茂正)

## 献堂された東京西ステーキ部 国立ワード部の教会堂

昨年2月3日、外気は冷たいながらもよく晴れあがった断食日の午後、相良地区代表ご夫妻、グッドウィ

ン伝道部長ご夫妻の列席を頂き、宮脇荘司ステーキ部長の管理の下に、新しく建てられた国立ワード部教会堂の献堂式が

敷地面積：397.05㎡  
建築面積：158.40㎡  
延床面積：301.60㎡



## 各地のたより



栗原茂正監督

●国立ワード部所在地：  
〒190 東京都立川市羽  
衣町3-7-8  
TEL.0425(27)5376

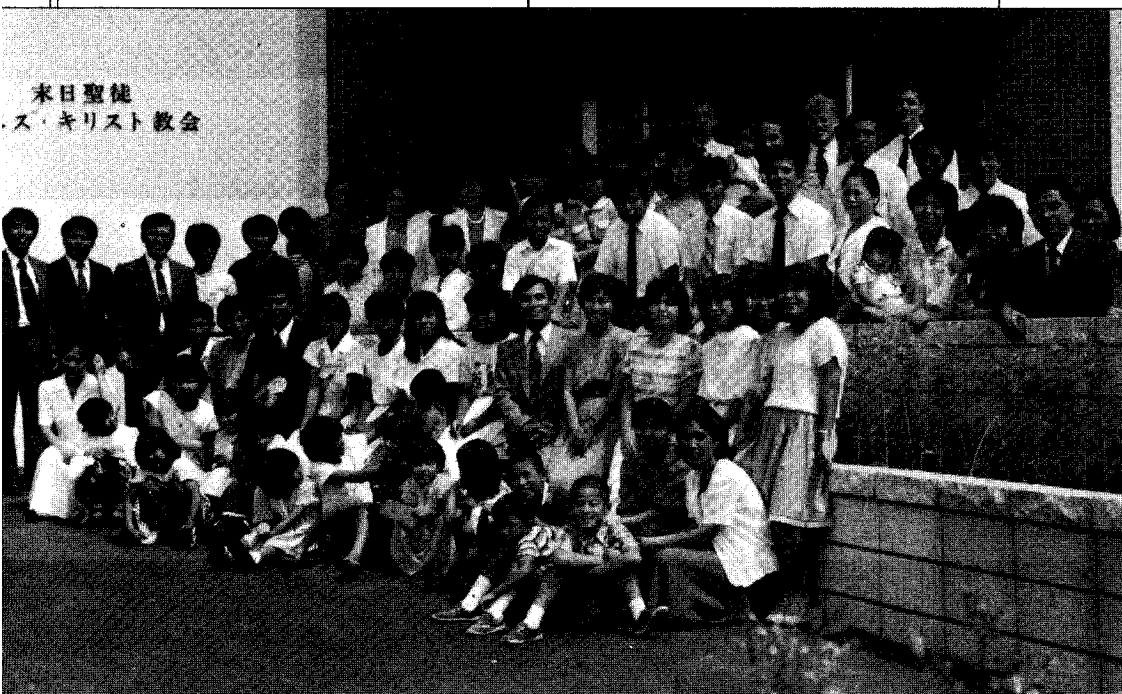
## 沖縄那覇ステークス支部名護支部献堂される

**19**69年、私が学生であった頃、アルバイト先の兄の店に毎日のように通う4人の宣教師がいました。彼らは陽気で、しかも謙虚な態度を失うことなく、私の勤めるコーヒーを決して口にしませんでした。彼らの伝道所は潮の香りのする海辺にありました。

1978年に妻と私がバプテスマを受けたときの教会は、海辺にあったときの教会と同じく何の装飾もありませんでした。ペンキの塗り替え、草むしり、清掃と、教会員は心をひとつにして奉仕しました。さらにまた、伝道、ホームティーチング、訪問教師、系図探求、家庭菜園、食糧貯

蔵と、教えの一つ一つを実行に移していった時代でした。特に玉城真光前支部長を中心とするホームティーチングの100パーセント達成は、意義深いことでした。

その間に私たちは新しい教会堂の用地を探し続け、約6年を費やして国道沿いの小高い丘に425坪の土地を確保すること



金城時男支部長

●名護支部所在地：  
〒905 沖縄県名護市  
字名護熱田原2474  
TEL.0980(52)3165

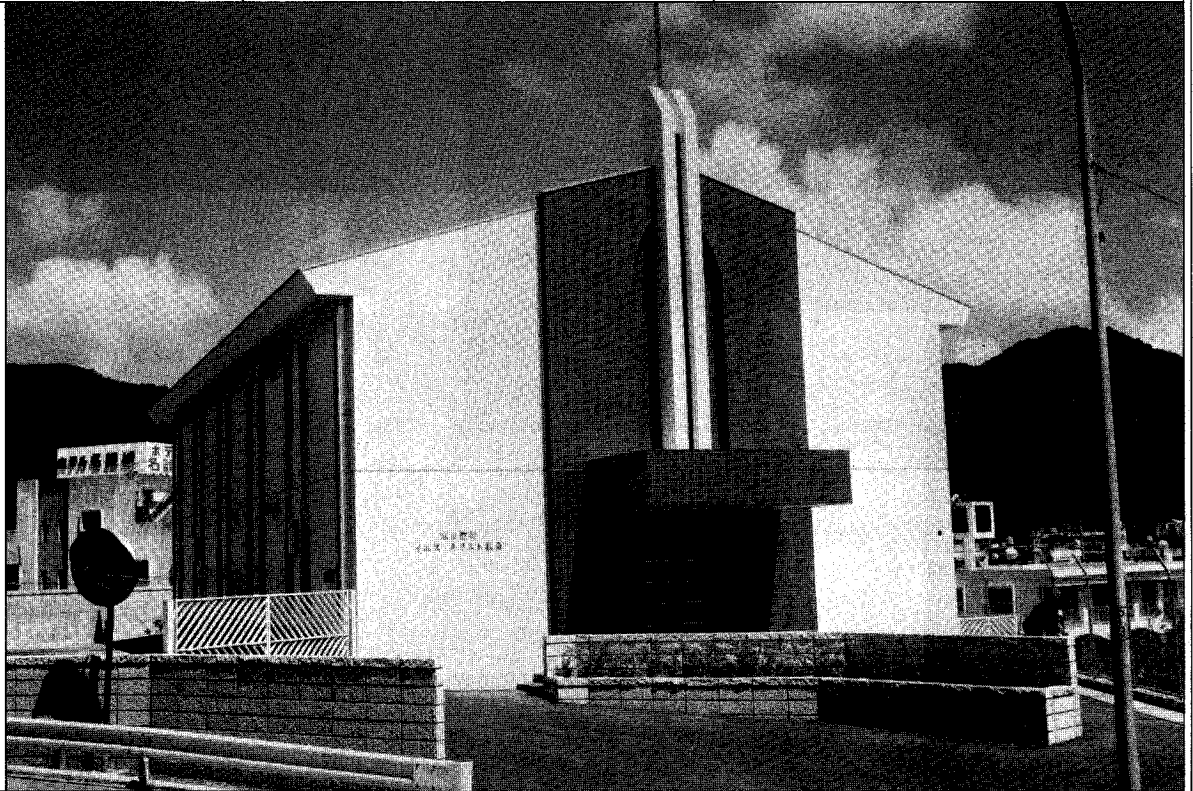
# 各地のたより

ができました。地目変更、境界杭の設置と、工事着工までに管理本部の不動産管理課の兄弟たちが何度か来沖してくれたことでしょう。多くの時間と経費を要して、1985年8月に教会堂は完成しました。

現在、太陽の光が隅々にまで差し込む

明るい部屋で、共に福音を分かち合えることに心から感謝しています。私自身も、生後11カ月で脳性麻痺となった長男を頭とした6人の子供たちと共に、この教会であふれんばかりの祝福にあずかっています。私たちが生きる意味を真剣に問う

ならば、その問いに対しての十分な答えをこの教会は与えてくれることを証明します。また生ける神が私たちに希望を与えるために、いつも導いてくださっていることを証明します。(名護支部支部長・金城時男)



敷地面積：  
1,380.81㎡  
建築面積：  
237.83㎡  
延床面積：  
459.03㎡

## 編集室から

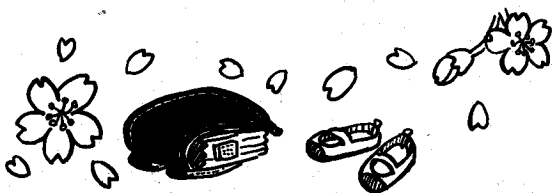
▶「聖徒の道」の原稿を常時募集しています。各地のたよりには北は北海道から南は沖縄までの幅広い話題を採りあげたく思いますので、広報ディレクターあるいは各種催し物を担当する高等評議員/地方部評議員の方はレポーターを手配して下さるようお願いします。

▶6月号掲載分の締切は4月10日(必着)です。投稿には必ず連絡先(電話番号)を記入してください。

▶あて先：〒106東京都港区南麻布5-10-30 末日聖徒イエス・キリスト教会「聖徒の道」編集室 ☎03(444)5264

訂正

3月号で紹介した鎌ヶ谷ワード部(p.13)の住所が旧住所のままでした。おわびして訂正いたします。新住所：〒273-01千葉県鎌ヶ谷市道野辺892-70

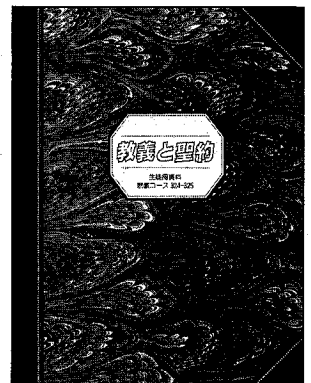


## 渋谷ブックセンターから

「教義と聖約」生徒用  
資料(新刊)

A4変 597頁 1,000円

インスティテュート(18-25歳)、生涯教育(26歳以上)で学ぶための生徒用資料。教義と聖約の理解しにくい聖句の注解や地図、巻末に付されている主題別索引は、教義と聖約の研究を効果的に進めるよい助けとなる。



### ●ペンソン大管長のカラー写真(新発売)変更のお知らせ

2月号で紹介したペンソン大管長の写真は、3月号の表紙のものを予定していましたが、3月号本文1ページのもの(最新)に変更させていただきます。ご了承ください。定価50円。